
世界の柱

Monyu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の柱

【Nコード】

N5527W

【作者名】

Monyu

【あらすじ】

世界の均衡を保つために「柱」が必要な世界。そんな世界で「柱」として選ばれてしまった少女の名は、アンジェラ。王族の姫君で本来なら蝶よ花よと育てられるはずだった。そんな少女が様々な人の力を借りて、過酷な運命に立ち向かっていくお話。予定では恋愛ものになるはず。

プロローグ

「マリア、準備はできてる？」

フワフワの金髪にぱつちりと開いた青の瞳。形の良い唇はぷくりと膨らんでおり、

やわらかそうである。無駄のない体に出るところは出ている。この絶世の美少

女と評されている少女は、アンジェラ・フォーワード・デンステンブルク。「世界

の柱」と呼ばれる少女で、16歳の誕生日を機に、精神的な死を強制される立

場にある。とても過酷な運命を背負う少女は決して悲観することなかった。

むしろ、楽しんでいた。

「はい。準備は万端です。アンジェラ様」

短く切られた茶色の髪がさらりと揺れる。

黒に近い茶色の瞳は、引っ込み思案で内気なマリアのものとは思えないほど

の光を放っていた。それは、侍女として、友人としてアンジェラに

一生をささげ

る覚悟だった。

「うふふ。それじゃあ、行きましょう。マリア」

「はい。アンジェラ様」

いたずらが成功した子供のように無邪気な笑顔とともにアンジェラとマリアは、

部屋から消えた。

残ったのは、転移の魔方陣と父である王に宛てた手紙のみだった。

侍女マリアが決意した日（前書き）

一応本編ではありますが、読むのが面倒だと言う人は、プロローグの後に精霊界1を読むことお勧めします。

侍女マリアが決意した日

赤、ピンク、黄色、紫、色とりどりの花が咲いた庭園に、天使かと思ふほどの美

少女がひとり優雅にお茶を飲んでいた。その傍らには、少女の専属侍女、兼、親

友の少女の姿がある。

「後、半年で16歳になるのね」

飲んでいたお茶を置き、じっと紅茶に映る姿を見つめていた。

金髪の髪に碧い瞳。整った鼻筋に形の良い唇。

程よい長さのまつ毛に弓なり型の眉。

「アンジェラ様」

憂いを満ちた瞳で、紅茶を見つめるアンジェラに侍女マリアは、思わず声をかけた。

「ふふ。ごめんなさい。少し考え事をしていたの」

マリアの視線に気づき、パッと顔を上げフワリとほほ笑む。

マリアはその天使のような類笑みを見て、世界を恨んだ。

なぜ、この少女だけがこのような過酷な運命を背負らなければいけないのか。

そんな世界なんて滅んでしまえばいいのに。

薄暗いマリアの気持ちと反して、アンジェラは、これ以上ないぐらの笑みを作り

マリアを手招きする。引き寄せられるように顔近付けるマリアに、アンジェラ少し

申し訳なくなった。今から話す内容は間違いなくマリアの人生を狂わせてしまうか

らである。それでも、アンジェラはマリアを巻き込まずにはいられなかった。

だって、マリアは彼女にとっての唯一無二の親友で、ずっとそばにいてほしいひ

とだから。近づいてきたマリアに内緒話をするような小さな声で伝えた。

「私、ここから逃げようと思うの。協力してくれない？」

マリアは驚いてアンジェラの顔を凝視する。

アンジェラは、とても楽しそうに微笑んでいる。

マリアは、ふと幼いころのアンジェラを思い出した。昔も同じようにアンジェラがと

んでもないことを言い、マリアが驚きのあまりアンジェラを凝視したことがあった。

そのときも、今と同じように微笑んでいた。

「驚かせてごめんなさい。でも、何の計画もなしに逃げるわけじゃないのよ。実は

ね、私が世界の柱に選ばれた時から考えていたことなのだけど、この世界の柱

と呼ばれる存在に会ってみようと思うの。会ってみて本当にどう仕様もないか確

かめたいの。思ったより準備に時間がかかってしまったから、もしかしたら時間

が足りないかもしれないけど、それでも、次の”柱”が助かるかも知れないで

しょ。だって私が”柱”になれば、1000年は安泰なのだから。それでね、マリアに

は、時間が足りないだけで、次の”柱”が救えるなら、その”柱”を救ってほしい

の。だから、一緒に今の柱達に会いに行ってくれない？」

一気に言った後に。マリアの返事を待つ。

唐突であるということは、アンジェラ自身が良く分かっている。そして、強制するこ

とができないということも。ドクドクと自身の心音が聞こえる。柄にもなく緊張して

ることにアンジェラは内心苦笑する。いつも、様々なことをいたずらをたくらんで

は、実行したが、いつまでたっても慣れないものね。

しばらく放心していたマリアは、大きく深呼吸をしてから、

「お供させてください」

と答えた。茶色の瞳がまっすぐ見据える先の少女は、年相応のかわいらしい笑

顔で「ありがとう」と言った。

嬉しそうに微笑むアンジェラを見ながら、マリアは心に誓った。

絶対に、自分よりも次の”柱”のために行動するこの少女を救ってみせると。

天使の専属騎士（前書き）

一応本編ではありますが、読むのが面倒だと言う人は、プロローグの後に精霊界1を読むことお勧めします。

天使の専属騎士

青みがかった黒の髪に、深い藍色の瞳を持つ青年は、普段飲まない酒を口にしながら

ら考えていた。琥珀色の酒からは、柑橘系の香りがしている。

「どうしたものか」

手にある琥珀色の酒を見つめつづやく。

青年の名は、シン・ルシュバリエ。名門騎士の家系で、王家に仕えてきた家系でもある。

その家系の二男であるシンは、15歳の時にアンジェラの専属騎士として配属され

た。その任は、一般的な専属騎士と異なり、アンジェラが16歳になるまで、無事に過

ごせるようにすることに重きが置かれており、主人が16歳になった後は、「世界の柱」

を守ることにへと変更される。世界の柱に選ばれてしまった不運な少女の専属騎士に

なると分かった時は、その任の重さに恐れ慄いた。そして、主人である少女に対面し

た日は、その美貌に目を奪われた。王族の証である金髪に、きらきらと光る碧い瞳。

形の好い弓型の眉に、長すぎない、でも短くもないまつ毛。スツと筋の通った鼻に、ぷ

くりと膨らんだ色の好い唇。天使に出会ったと本気で思った。

天使は、何の穢れも知らない純な瞳で、まっすぐこちらをみて、

「はじめまして。アンジェラ・フォーワード・デステンブルクです。

これからよろしく願いします」

と、鈴のようなかわいらしい声で言った。

惚けていた自分に喝をいれて何とか挨拶をし、その日から少女の専属騎士となっ

た。少女の騎士となつてすぐの頃は、不運な少女に同情し腫れものを触るように接し

ていた。しかし、そんな私に少女は、微笑みながら言った。

「私は決して不幸ではないわ。だって、１１年と言う時をもらっているもの。人間として

は、短いかもしれないけど、それでも花や鳥にしてみればとても長い時間よ。その

間に、私は人生を楽しむの」

その日に彼女は、城の外に出ようと庭園にある一番高い木に登って下りられなくなっ

ていた。それから、彼女は様々な事件を起こした。地下を作って城の外に出ようと

思い掘った穴に侍女頭が落ちて軽いけがをしたり、厨房に忍びこんで、好物のイチゴ

を食べ、お腹を壊したり、専属侍女を影武者にして勉強をさぼったりと。あまりにも無

邪気に過ごす主人に、次第に”不運な少女”という位置づけは薄れていった。そして、

気がつけば、実の妹のように可愛がる自分がいた。それは、私だけではなく、主人に

接する人々全てがそうになっていた。

それから、少し時がたち、年頃になった主人は、まだ少女のあどけなさが残るが、随

所に女性を感じるようになった。服の上からでもわかる女性らしい曲線や、近くに

行くとふわりと甘い香り。それでも、昔と同じように無邪気に抱きつく主人に妙な焦り

を感じ、少し距離を置くように接した。時折、寂しそうな表情をしていたが、その甲斐

あつていきなり抱きつくことはなくなり、振る舞いも女性らしいものへと変わった。

いたずらも全くなくなって、落ち着いたと思っていた矢先に、3年ぶりのとんでもない

たずらをかましてくれた。不運な少女で天使で主人であるアンジェラは、転送陣を

使って、専属侍女をひとり連れて城を出ていった。

専属騎士であるシンは、本来なら走り回って探さなければいけないのだが、あまりに

もアンジェラに近いがゆえに、ある疑惑が降りかかっていた。城からの逃亡に手をか

していたのではないかと。そのため、走り回っているはずの専属騎士は、自室に軟禁

状態である。

「どつしたものか」

再び同じことをつぶやいて、窓の外へと視線を移す。

自室の窓から見える星たちは、煌々と輝いていた。

アンジェラの目的

アンジェラは、王城にいる人々を欺き、侍女マリアと共に精霊界（と思われる場

所）に来ていた。5歳のときに世界の柱に選ばれた時は、その苛酷な運命に悲し

んでいた。しかし、元来、前向きな気質のアンジェラは、ひとしきり落ち込み悲し

むと、どうすれば長生きできるかを考えた。そして、今は亡き母がいつも言っ

たことを思い出した。

「あきらめず出来ることをしなさい。結果がどうであれ、

後悔だけをしないように」

そして、アンジェラは、その教えを実行していた。問題に直面した時は、まずその

問題の本質を知ることだ、といつだか家庭教師が言っていた。よく意味が分から

ずヴァン兄に聞いたところ、「要は何が原因でそうなったのかを知ることだよ」と言

われた。だから、何故、世界の柱が必要なのかを調べた。王城にある書庫で本

をあたったが、幼いアンジェラにはよくわからなかったので、柱を管理する魔法使

いや王である父、侍女、騎士などから話を聞いた。少しして、本の内容が理解で

きるようになり、そこで様々なことを知った。世界の柱は、全部で3つあり、人間、

精霊、魔族のにそれぞれ柱となる存在がいること。そして、その全ての種族にお

いて、王族の血を持つものに限られること。そうして調べているうちに、ある本を

見つける。表紙はとても立派なのだが、中身は真っ白で何も書いていない本。書

庫の一番奥で眠っていた本。何故だか気になり、部屋に持って帰り、パラパラと

めくっていた。と、あるページを開くとうつすらとひかり、魔方陣のようなものが浮

かび上がった。その内容は全く読みとることができなかったが、頭の中に音が流

れ込んできた。その音に従い口を動かす。一瞬、ふわっと浮遊感があったと思った

ら、庭園で一番高い木の枝にいた。訳が分からず混乱しているところに、専属騎

士のシンがきておろしてくれた。なぜそんなところにいたのかと聞かれて、なんと

なく素直に答えずに、城の外に出たかったんだと伝えた。それから、その本を

なんとなしにペラペラめくっていると、いつの間にか厨房にいたり、深い穴の底に

いたりと思議なことが続いた。そしてあるとき、ふと気がついた。これは、アン

ジェラが魔法の練習をした後に限って不思議なことが起こると。試しに魔法を使

う時のように神経を集中し、本をめくると魔方陣が浮かび上がった。そして、その

魔方陣を唐突に理解した。これは、転移の魔方陣であると。それからアンジェラ

は、様々なことを試し、いつしか世界の柱に会うために使えないだろうかと考える

ようになった。そして、3年かけて精霊界へ行くための魔方陣を完成させた。その

日に侍女マリアに計画を話し、ついてきてくれるように頼んだ。そして、翌日の早

朝3時に計画を実行し、今はおそらく精霊界にいる。

魔物（前書き）

今回は流血表現があります。苦手な人はご遠慮ください。

魔物

王城からの逃亡に成功したアンジェラとマリアは、妖しい雰囲気の森にいた。

木々の間から洩れる光が、きらきらと目の前の湖を照らしている。空気も澄んで

おり、空気が美味しいとすら感じる。一見すると美しい森だが、この森にはおびた

だしい量の魔力があふれていた。その量は、人並み程度にしか魔力のないマリ

アですら感じるものであった。こんな魔力は、決して人間界では存在しないもの。

確かにここは、人間界ではないのだ。転移の魔方陣が正しく動作したのなら、精

霊界なのだが、アンジェラ達には、そのことを確かめる術^{すべ}を持たない。異

界に飛ぶための転送陣を実行したアンジェラは、ひどい倦怠感に襲われていた。

「アンジェラ様、少し休憩をしましょう」

マリアは顔色が悪く、脂汗をかいているアンジェラを慮る（おもん

ばかる)。

時間のないアンジェラとしては、出来るだけ早く精霊王を探し出したかったが、精

霊界に来ることではいっばいで、王を探す方法も戻る方法すら分からなかった。そ

んな状態で闇雲に歩いては仕方ないだろうと判断し、マリアの提案に首を縦に振

る。木陰で休んでいると、マリアが持ってきた水筒を差し出す。

「お飲みください。少ないですが、少しは足しになりますと思います」

王城から逃げるときに、最低限の食料と水を持ってきた。今から、目的を果たす

までにどれくらいの時間がかかるのか分からない状態で、水を飲むことをためら

う。その様子に気づいたマリアは、安心させるように言う。

「大丈夫ですよ。アンジェラ様。この近くに湖がありました。飲み水はそこで汲め

ます。だから、飲んでください」

いつものアンジェラなら、その湖の水は本当に飲めるのかとか、水を求めて野生

の動物に遭遇するかもしれないとか、考えることができたのかもしれないが、膨

大な魔力を消費し、意識を保つのがやっとの彼女は、言われたとおりに水を飲ん

だ。喉を通る冷たい水に、ほんの少し生き返ったような心地であった。「もう休ん

てください。」とマリアの優しい声に誘われるように瞼を閉じて、アンジェラは眠っ

た。フワリとマリアからいい香りがした。

- - - - -

マリアの膝枕で気持ちよさそうに寝ているアンジェラ。

慈しむ様にアンジェラの金髪をなでる。主人であるアンジェラと一緒にいると本当

に飽きない。予想の範疇を超え、その先に未来を見据える主人。おそらく彼女の

思考を理解できることはないだろう。でも、だからこそ、一緒にいて楽しいのだろ

う。お疲れ様です。と小さく呟くマリア。

ふと、悪寒が走る。人並みの魔力しかないマリアだが、元来臆病で引っ込み思案

のマリアには人並み以上の危機察知能力がある。目を瞑り、神経を集中させる。

ほんの少し先の湖に、どす黒い魔力が複数存在する。人間界では絶対に感じる

ことのない深い闇がそこにあった。どうやら、あの悪寒は”あたり”だったらし

い。その魔力に気付かれないようにアンジェラを起こす。ぐっすり眠っているため

になかなか起きない。少しずつ気配が近づいてくる。はやる気持ちを抑えて、何

度もアンジェラを揺さぶる。

「マリア？」

目を覚ましたアンジェラが寝ぼけながら、名前を呼ぶと同時に、気配が急速に近づいてきた。とっさにアンジェラを死角に突き飛ばす。

いきなり突き飛ばされたアンジェラは、何がんだかわからないまま

呆然とマリアを

見ていた。マリアの向かいには真っ黒な毛並みに複数の尾をもつ狼のような生き

物が、複数いた。マリアは、アンジェラに視線を向けずに「逃げてください」と言う

同時にアンジェラがいる方向と反対に走り出した。咄嗟にマリアを追いか

ようと立ちあがったが、その場から動くことができなかった。そこには、簡単な

配消しの魔方陣と一時的な影縫いの釘が刺されていた。あの状況でマリアは王

城から持ってきた魔道具とアンジェラがこっそりと書庫に行くときに使用していた

気配消しの魔方陣が書いてある紙を使い、アンジェラの身を隠したのだった。

普段なら、こんな影縫いから抜け出すのは、簡単なことだった。しかし、転送陣を

使ってまだそれほど経っていないアンジェラにはどうすることもできなかった。

- - - - -

何とかアンジェラの安全を確保したマリアは、必死に走りながら考えた。

どうすれば、助かるのか。

何度も木の根や草に足を取られ、こけそうになる。 なぶ 跳るように一定の距離を保ち

つつ追いかけてくる魔物。ふと、追いかけてくる魔物の気配が減ったと思ったら、

進行方向に2匹の魔物が姿を現した。

やられた。囲まれたのだ。

じりじりと近寄ってくる魔物たち。前にも後ろにも行くことのできないマリア。

マリアの正面にいた魔物の一匹が均衡状態を破り、マリアに襲いかかる。

首もとを狙う魔物に咄嗟に左によけ、肩に牙が食い込む。

「~~~~~」

あまりの痛みに声にならない。なおも牙は強く食い込み、そこから赤黒い血がドク

ドクと流れている。魔物は首を振り、マリアの左腕を食いちぎった。激痛が走る。

「~~~~~」

再び声にならない叫びをあげ、口をパクパクと動かす。激痛で呼吸がうまくできな

い。朦朧^{もろう}とする意識の中、マリアはアンジェラに懺悔した。

ここで死ぬのことをお許してください。

やってくる死をまつマリア。ふと違和感を感じた。しかし、その違和感の正体を知

ることもなくマリアは意識を失った。

「ふむ。原型をとどめたまま転移してきたから、どんなもの思っただが、大したこと

ないのう」

先程までいた魔物を蹴散らし、意識を失っている少女見ながらつぶやいた。

その声には、落胆の色が表れていた。

「転移した人間は、二人いたので、おそらくお共のものでしょう」

抑揚のない声で淡々と答える。

「そうじゃろうな。なんとも凡庸な少女じゃ。カイル、手当をしてやれ。村まで連れ

て行く」

「本気ですか？」

カイルと呼ばれた青年は、信じられないといった風に聞き返す。

「本気じゃ。はよう治してやれ。死んでしまっじゃろ」

怪訝な表情をしている青年に再び命令し、長身の女性は村へと向かった。

言われたとおりに、少女を手当てした青年は、面倒なことになりそうだと思った。

エルフ

目覚めたらそこは森ではなかった。辺りを見渡そうと体を起こそうとして、バラン

スを崩す。途中まで起き上がっていた上半身がボスンと音を立ててベットに戻

る。もう一度起き上がろうとして、左手をベットにつけようとして気がついた。左腕

がまるまる一本ない。

えっ。

その状況に頭が追い付かず、呆然とする。

「なんじゃ。目が覚めたのか」

若葉色の髪を持った長身の女性がこちらにやってくる。髪で隠れて分かりづらい

が耳が尖がっている。このような特徴を持つ種族は一つだけ、エルフだ。

自分の状況を理解していない様子のマリアに、女性は状況の説明をするため

に、体を起こすのを手伝ってから、ポンポンと頭をたたいた。

「何が何やら分からないと言った表情じゃな。お主はな、魔物、世界の理から外

れたものに、襲われていたのじゃ。その左腕は、その魔物にやられ、失ってしまっ

たのじゃよ。すまないな。もう少し早く助けてやれば、そうはならなかったのだ

が」

慈しむように話をされ、マリアは少しずつ落ち着きを取り戻していった。

「助けていただきありがとうございます」

話の内容から助けられたのだろうと判断し、マリアはお礼をいう。

「なに、気にすることはない。もともと魔物を退治するついでだったからの」

気にするなということだろうか。それにしてもあのけがでよく助かったものだ。

「そう、ですか。あの、ここはどこなんですか」

「エルフの村じゃ。」

確かにこの女性はエルフといった。エルフは精霊界に棲む種族。と

いうことは、こ

こは精霊界で、転移の魔法陣は正常に動作していたということになる。

「助けてもらった身でおたずねするのは、失礼かもしれませんが、どうして私を助

けたのですか」

人間が人間を助けるのはなんとなく理解できる。でも、エルフはどうなんだろう。

少なくとも魔力の質も見た目の違うのに同族だとは思われていないだろう。

「今日の未明にな、人間界からこちらに転送してきたものがおつてな。しかもその

者たちは、世界の理から外れることなく転送してきたのじゃ。今までも何度か転

送されてきたものはおつたが、その者たちは皆、理から外れ魔物となってしまう」

た。だから、今回の者には、興味があつてな」

金色の瞳を細め、にやりと笑う。

「して、もう一人はどうした？何をしにこの世界に来たのじゃ？」

至極楽しそうに、訪ねてくる。

「母上、そのように問い詰めては、彼女が怯えてしまいますよ」

いつの間にか現れた青年が女性を制する。

「問い詰めてなどおらぬ。ただ気になることを聞いたただけだ」

先程までの楽しそうな笑みは消え、代わりに拗ねた子供のような表情になる。

「どうせ、意識を戻されて時間はそれほど経っていないのでしょう」

女性と同じ金色の瞳が細められ、避難するように女性を見る。

「息子の癖に生意気ぞ」

口を尖らせブーブーと文句を垂れる。

二人のやり取りは、親子逆のように見える。しばらく問答を繰り返して、諦めたよう

に女性は部屋を出ていった。その際に、青年が女性に耳打ちし、その後、女性は

ものすごく楽しそうな顔をして出ていった。女性とのやり取りを終え、小さくため息

をついてから、マリアの方へと向き直る。

「お騒がせして申し訳ありません。お身体の加減はいかかですか？」
青年は丁寧に謝罪し、容態を訪ねた。

「大丈夫です。だるさも特にありません」

左腕がないことには、驚いたが、二人のやり取りを見ているうちに、
元気を取り戻

していた。

「そうですか。それは良かったです」

ニコリと人の好きそうな笑みを作り、思い出したように青年が言う。

「そう言えば、自己紹介がまだでしたね。私はカイト。そして先程
いた女性が、私

の母でアーデスといいます。騒がしい人ですが、悪気はないので、
気をわるくしな

いでください」

母の紹介をしている時のカイトは、困ったような表情をしていた。

「私は、マリア・エトワールと申します。先程のことは気にしないで
ください。二

人のやり取りをみて、少し元気をとりもどしました」

きっと悪い人たちではない。むしろいい人たちなのだろうとマリアは、思った。

「そう言っていただけで幸いです。まだ、本調子ではないでしょう。今日はもうお

休みください。詳しいお話は、その後で結構ですから」

カイトはそう言って、起こしていた体をゆっくり寝かしつけた。

「ありがとうございます」

マリアは言われたとおりに、瞼を閉じると、あっという間に眠りに就いた。

噂の魔女（前書き）

ここからアルナートの魔女の主人公が度々絡む様になります。なるべく、本編のネタバレにならないようにしていますが、こちらの作品の方が時間の進みが早いので、そちらを読んでいる方は、アルナートの魔女の本編でアンジェラという名前が出るまでは、読まないことをお勧めします。

噂の魔女

マリアは白い空間に立っていた。

ここはどこ？

きよろきよろと周りを見渡すがなにもない。ただ白い空間が広がっている。

「やっと見つけた」

不意に声がする。声の方へと振り向くと、自分と同じくらいの身長
の黒髪の少女

が立っていた。

「あなたはだれですか？」

何故だか、怖いとは思わなかった。

「ソフィアージュ、えっと、アルナートの魔女の方が分かりやすいかな？」

”アルナートの魔女”、噂ぐらいは聞いたことがある。魔力が全くないのに、さまざま

まな魔法陣を駆使して魔法を使う魔女。魔女が良しとしない人は、
アルナート領

にすら入れない。

「どちらでも構いません」

呼び名なんてどうでもよかった。

「そう、じゃあ、ソフィでいいや。それで、マリアは今どこにいるの？」

どこといわれても、こんな真っ白な空間がどこなんて知らない。

「ああ、ごめん。ここはあなたの夢の世界で、私はアンジェラ様を探してる」

アンジェラ様を？

精霊界にいる私にコンタクトをとれているのだから、アンジェラ様が見つかるのも

問題かもしれない。そんな、何もできないまま連れ戻されるなんて。

「えっと、アンジェラ様とマリアは精霊界にいるんだね。それで、マリアとアンジェ

ラ様は、精霊界のどのあたりにいるの？」

さっきから声に出していないのに何で？

「ああっと、そうか。説明してなかった。えっと、ここはマリアの夢の中だから声に

出さなくても意志が伝わるの」

盛大に顔を歪めてソフィをにらむ。

「うつ、ごめんなさい。忘れてたのよ」

本当にすまなそうに謝るソフィに、とりあえず溜飲を下げた。

ふうつと息をつきマリアは聞いた。

「見つけたらすぐに連れ戻すのですか？」

その質問に意外な答えが返ってくる。

「いいえ。すぐには連れ戻さない。アンジェラ様には、目的を果たしてもらおう必

要があると思うから。ただ、マリアとアンジェラ様だけじゃ危ないから、もう一人

そっちに送ろうと思ってる。で、その人とマリアとアンジェラ様に合流して欲しい

んだよね」

「そうですか。なら、お教えします。私はとある事情から、アンジェラ様とはご一緒

におりません。ですから、アンジェラ様がどのあたりにいるのかは、

分かりませ

ん。私自身は、エルフの村にいます」

先程のソフィの返答から、アンジェラの邪魔をするつもりがないとわかり、素直に

状況を話した。

「エルフの村ね。じゃあ、とりあえずマリアは、大丈夫そうだから護衛はアンジェラ

様の方に送るね。協力ありがとう」

そういうとソフィは、スッと音もなく消えていった。

ほどなくしてマリアは目を覚ました。

仲間をゲット

アルナートの魔女、ソフィとのやり取りの後、目を覚ましたマリアは、命の恩人で

あるアーデスの手料理を食べていた。トマトをベースとしたスープに、ブロッコ

リーやニンジン、いんげん等の野菜が入っており、それらと一緒にコメを煮込ん

だ料理だった。

「どうじゃ、美味しいか？」

「はい。とてもおいしいです」

マリアの答えに安堵の表情を浮かべる。

「病人食なぞ初めて作ったから、心配じゃったが、美味しいのならよかった」

エルフは病気にakaranいのだろうか？と首をかしげていたマリアだが、種族が

違えばそういう違いもあるのかもしれないと、一人納得するのだった。

左腕がない状態の食事はとても難儀だが、何とか食べ終わる。

その様子をニコニコと上機嫌に見つめていたアーデスは、食べ終わった食器を

片づけ、再びマリアのところに戻ってくる。

「さて、3日間も寝てたんのじゃから、もう起きても大丈夫じゃろう。」

少し散歩でもせんか？」

「3日!!!」

アーデスの言葉に驚きのあまり声が出ていた。

「なんじゃ、そんなに驚くことかの？」

不思議そうにつぶやくアーデス。

「どちらかと言えば、助けたその日の数時間後に

目を覚ましたことの方が珍しいかの」

さらに呟くアーデス。自分が3日間も寝ていたことに呆然としているマリアにはそ

のつぶやきは聞こえていなかった。

「ほれ、ぼーっとせんで散歩にいくぞ。体がなまっておるだろうから、」

良いリハビリになる」

未だに呆然としているマリアに声をかけ急^せかす。

ベットから出ようとしてバランスを崩し、アーデスに受け止められる。

「まだ慣れぬかもしれぬが、左腕がなくなつたゆえ重心がずれておるのだから、

気をつけねばな」

マリアに率直な事実を告げるその言葉は、とても耐えがたいものだが、その声音

からは、マリアを慮^{おもんば}る様子がうかがえた。

「はい。ありがとうございます」

左腕がないのは頭でわかっている、動くたびにつきつけられる勝手の違いに気

持ちが塞がれていく。

「よいよい。助けたのは、わらわじゃ。助けたものが最後まで責任を持つのは、

当り前じゃ」

優しげな表情を浮かべるアーデスに、カイトとやりあっているときとは別人のよう

だと思う。

「さて、気を取り直して散歩に行くかの」

マリアの姿勢を正し、陽気に言う。

「はい」

木洩れ日できらきらと朝露が光っている。

青々とした木々が生い茂っている。

その木々の枝で鳥たちが何やらチュンチュンと会話をしている。

「綺麗なところですね」

「そうじゃな」

腰まである若葉色の髪がそよ風と戯れている。

「マリア、そなたは、何ゆえ精霊界に来たのじゃ？」

少し前を歩いていたアーデスが振り返りマリアに問うた。

どこから話そうかと悩んでいたマリアだが、返事を持つアーデスを見、

全て話してしまおうと思った。直感的に言つべきだと思ったから。

「私は…」

マリアは、アンジェラが世界の柱であること、そして、そのアンジェラの運命に

マリアが納得していないこと、アンジェラが自分をそして次の柱を救うために、各

種族の柱に会おうとしていること、マリア自身はアンジェラを救うために同行して

いることを伝えた。

静かに話を聞いていたアーデスは、非常に楽しそうに言った。

「気に入った。そなたもそなたの主人もな。10000年以上生きていてこのような面

白いことは初めてじゃ。出来る限りの手助けをしよう」

かくしてマリアとアンジェラは、エルフの長を味方につけた。

- - - - -

シンとアンジェラは、移動をして川のほとりで一夜を明かすことに

した。

辺りはすっかり暗くなっていた。

「シン、そのテントや食料はどこから出ているの？」

先程までお姫様だっこされていアンジェラは、手際良く野営の準備をしているシン

に尋ねた。何もない空間からポンポンと出てくる様子は異様としか言いようが

なかった。

「ああ、これですか」

この状況に疑問を持たない者は、おそらくソフィアージュ殿だけだろう。かく言う私

もソフィアージュ殿初めて会って、同様の光景を目にした時は、驚いたものだ。

本当は野営の準備が終わってからゆつくりと説明するつもりだったが、珍しく驚いて

いるアンジェラを放置するのは、かわいそうだ。

右手の人差指にあるアメジストの指輪をアンジェラに渡す。

その指輪を受け取ったアンジェラは、感じたこともない力の気配に

驚く。

魔力に似ているが、人間界にも精霊界にも感じたことのない力だ。

「何なのこれ？」

その異様さに思わずこぼした言葉の意味を、シンは異なる意味でとった。

「ソフィアージュ殿から頂いた荷物入れです。原理は全く分からないのですが、

亜空間に自由に物を出し入れできるそうです。荷物の持てる上限は、使用してい

るものの魔力に依^よるそうです」

指輪から感じる力に、シンの言った説明。

アルナートの魔女はどこまでも常軌を逸した存在なのだと思います知られる。

シンの説明のとおりなら、アンジェラがつけた方が物を持てるのではないかと思

い、指輪を右手に薬指にはめる。シンの指にはまっていたものだから当然の如く

ゆるゆるのはずなのだが、シュツと音を立ててアンジェラの細い指にぴったりとは

まった。その光景に全く驚くことはなかった。先程の異様な光景のせいで感覚が

マヒしているのだろう。ゆっくりと意識を集中させていく。すると目の前に穴がで

き、その先には何もない真っ白な空間が広がっていた。おそらくこれが荷物を入

れる空間なのだろう。しかし、何も入っていない。シンは荷物をすべてとり出した

のだろうか。

「シン。この荷物入れは何も入っていないのだけど」

その質問にシンは思い出したように答えた。

「その指輪は、使用者が変わると入れる袋が変わるので、他の使用者が入れて

いたものは、本人以外取れないんだそうです」

なるほど。それじゃ、シンの入っていた荷物は私が取り出すことはできないの

ね。それにしても、どういう原理なのかしら。

「これは、どういう原理なの？」

「申し訳ありません。よくわかりません。ただ、ソフィアージュ殿の”簡単な”説明に

よると、使用者ごとに魔力応じた亜空間が割与えられているそうです」

空間転移の本に似たような記述があったわね。あまりに難しいから、その根本的

な原理までは理解できなかったけれど。

「それだけで十分だわ。ありがとう」

多分詳しく聞いたところで理解できないだろう。そう判断し、今回の話は終わりに

する。指輪を外してシンに渡し、野営の準備の手伝いをする。何度か断られた

が、食い下がり無理やり手伝った。

実際問題、アンジェラは邪魔にしかないのだが、これから長くなる旅を考える

と何か出来るようにした方がいいと思い、シンは仕方なく手伝いをお願いした。

普段より時間をかけて、何とか準備を終え、疲れ果てたアンジェラはご飯を食べ

るとすぐに眠りについた。見張りのためにテントの外にいるシンは、空に輝く星を

みて、ふと思い出す。

アンジェラが逃亡したその日もこうやって星を見ていたなど。

空に輝く星は、人間界のそれより強い光を放っていた。

条件

アーデスとの散歩を終え、ゆっくりお茶を楽しむマリア。

「同じ種類の花の紅茶なのに、こつも違うんですね」

バラの香りがする紅茶を飲みながら、マリアは言った。

「そうなのか。わらわこの世界の紅茶しか知らぬからな」

濃厚なバラの香りとはちみつ並みに甘い紅茶は、さらにお湯で薄めて飲む。

「こちらの紅茶と違って、味も香りも抑え目なので、

アーデス様には物足りないかもしれません。」

にこりと微笑み答えると、そうかとだけ返した。

「時に、マリア。そなたはその体のまま、主人の元へ戻るのかえ？」

アーデスはちらりと左半身を見る。

このまま戻る以外に選択肢の持たないマリアにとってその質問は、心の傷をえぐ

る愚問でしかない。先程までの頬笑みは消え、悲しげにうつむくマリア。

「そなたが望むのであれば、治してやらんこともない」

「本当ですか！！」

勢いよく顔を上げる。

「ああ、じゃが、条件が付く」

「何でもやります。教えてください！！」

左腕が健在なら机に手について前のめりに聞いたであろう、

その様子に気圧されつつアーデスは答えた。

「条件というのはな、2つある。ハーフエルフとなることと、

そなたが男になることじゃ」

全く予想していなかった条件に、先程の勢いを失う。

「まあ、まだ時間はあるんじゃない。ゆるりと考えるとよい」

そう言つてアーデスは席を立つ。

「今日はもう疲れたじやろう。休むとよい。夕飯時には起こすゆえ」

マリアの体を支え、ベットへと誘導する。

ベットに入り目を瞑り、マリアは考えた。

腕が元通りになる。でも、人間ではなくなり、その上、男になってしまう。

もんもんと考えていたマリアだが、予想以上に散歩に体力を使っていたらしく、

しばらくすると眠りについていた。

決断（前書き）

今回はマリアサイドの話しかありません。アンジェラがいないと恋愛要素皆無です。恋愛要素を求めて呼んでいる方々には、申し訳ない限りです。

決断

マリアは、白い何もない空間にいた。

以前、アルナート魔女、ソフィアーヂュに会った空間だ。

ということは、会いにくるのだろうか？

「こんばんは。マリア」

突然何もない空間から現れたソフィアーヂュ。

「こんばんは。ソフィ。今回はどういった用件でしょうか？」

たいしたことではないように受けるマリア。精霊界に来てから、

様々なことを経験したマリア、本人も気づかないうちに神経が凶太
くなっていた。

「アンジェラ様のところに騎士の………シンを送った
から、報告しに」

途中で、何かを思い出すように唸っていたような。

「そうですか。ありがとうございます」

シンがアンジェラのもとに送られたと聞いて安堵する。

これで、また魔物に襲われても大丈夫だろう。

「それと、シンを送ってからわかったんだけど、アンジェラ様からエルフの村まで

かなり遠いから、マリアの方から迎えにいけない？」

「それは、難しいですね」

おそらくアーデスあたりに言えば、協力してくれるだろうが、アーデスはアンジェラ

様を知らない。マリアが探索をすればいいのだが、人並みの魔力では、200メートル

ル四方の探索が関の山である。

「んー。そっか。困ったなあ」

難しい顔して、うなっている。

「何か問題があるのですか？」

マリアの問いに、さらに眉間にしわを寄せ、しばし沈黙する。

「アンジェラ様からマリアのいるエルフの村まで、馬に乗っ

て、半年はかかる距離なんだよね」

半年・・・、歩いて移動しているだろうアンジェラ様たちは、もつとかかる。

それでは、間に合わないではないか。

ソフィアージュの返答に黙り込むマリア。

私にもっと魔力があれば、アンジェラ様を探し出し、迎えにいけるのに。

悔しさのあまり唇を噛む。

ふと、アーデスの言葉を思い出す。

亡くなった左腕を直すための条件にハーフエルフになるというものがあつた。

エルフは、確か人間よりも魔力があつたはず。

「ソフィ、あの、もし、私がハーフエルフになれば、どのくらいの魔力をこの身に

宿せますか？」

「えっ、マリアがハーフエルフ???」

突然の、予想もしない質問に思わず問い返す。

「はい。ハーフエルフです」

いやに強く返事をするマリア。

再びうーんと考え込み、ジーっとマリアを見るソフィアージュ。

そして、マリアの選択を決めた決定的な発言がされる。

「マリアなら、かなり強くなるだろうね。マリアの魔力は、澄んだ藍の単一色だか

ら、エルフの体は、かなり相性がいいはず。使える魔法は、風と水の魔法に限定

されるだろうけどね」

風が含まれているなら十分だ。探索魔法のほとんどは、風に属する。

不意に白い空間が歪む。

「ああ、もう戻らなくちゃ。マリア。私はあなたが何をしようとしているかはつきりとは

わからないけど、無理だけはしないでね」

そういつてソフィアージュは、スッと消えた。

それと同時に、マリアも目を覚ます。

「起きたか。もう少しで夕飯じゃ」

目を覚ますと、アーデスが枕もとの水入れを交換していた。

「アーデス様」

空の水入れを持って部屋を出ようとしたアーデスと呼ぶ。

マリアの妙に強い語調に、不思議そうにマリアのいるベッドへ戻ってくる。

持っていた水入れを再び枕元に置き、アーデスはたずねる。

「なんじゃ？」

まっすぐと見つめてくる茶色の瞳に強い意志を感じる。

「私の左腕を直してください」

茶の瞳が見つめる先の、金色の瞳は大きく見開かれていた。

夕食後

「私の左腕を直してください」

突然の決断に驚くアーデスであつたが、もう少しでカイトが帰ってくるので、

そのときにきちんと話そうと判断する。

「随分早急に決めたのじゃな。もう少しでカイトが帰ってくるゆえ、皆で晩御飯を食べた後でもいいかえ？」

「はい、それで構いません」

マリアは、決心が揺らぐ前にやってほしかったが、カイトが帰ってからと言つたの

だから、何か理由があるのだろう。もしかしたら、アーデスだけでやる作業ではな

いのかもしれない。

しばらくしてカイトが戻ってきた。その後、そわそわしながら食事をとるマリアを不

思議そうにカイトが見ていた。食事が終わり、いざ話し合いの場になると、カイト

がジーっとマリアを見つめる。そして、不意にマリアの首筋に触れる。

「ひゃあっ」

男性にほとんど触れられたことのないマリアは、とつさに身を引き、手をはたいた。その様子にぶつぶつと堪えきれず、アーデスから笑いが漏れる。

明らかにからかっているアーデスを無視して、カイトはマリアに問うた。

「今日、次元の魔女に会いましたか？」

その手には、おもちゃのネックレスが握られている。

中央には鈍く光るガーネットを模倣した粗野な石がついている。

ネックレスなんかつけた覚えのないし、次元の魔女など知らない。

マリアの知り合いの魔女と言えば、夢であつたソフィぐらいだ。

しかし、彼女は次元の魔女ではなく、アルナートの魔女と呼ばれていたはず。

アーデスは、首を傾げるマリアにわかるように言い直す。

「おぬしら人間が”アルナートの魔女”と呼んでおる人物じゃよ」

その呼び名を知らなかったらしいカイト、「人間界ではそのように呼ばれているの

か」とつぶやく。

「その方なら、夢の中で会いました」

その返答にアーデスは「やられたのう」と言い、にやにやとカイトを見る。

「母上、これは由々しき事態なんですよ？からかわないで下さい」
頭がいたいのだろうか？カイトは、コメカミをぐりぐりと押している。

「相手は、次元の魔女じゃ。仕方なかろう。それに今更そのおもちゃを壊したとこ

ろで、すでに正確な位置は、割り出されておろう」

「それはそうですが、」と腑に落ちない様子のカイトだが、アーデスに「どうしようも

ないことじゃ。あきらめろ」といわれ、とりあえずその話は終わった。ネックレス

は念のため壊された。

「さて、話がそれてしまったが、本題に入ろうかのう」

アーデスはなぜだが、カイトに憐憫の視線を送っている。

話し合い？

盛大に話がそれてしまった一行であったが、何とかアーデスによって軌道修正さ

れ、カイトにマリアはここに来た理由と、アーデスの提案をのみ左腕を治してほし

いと話した。その話を聞いている間、カイトは始終しかめ面をし、一方でアーデス

は実に楽しそうにカイトを見ていた。話が終わりカイトは静かに「わかりました」

とだけ答えた。その様子に了承してくれたのだらうと安堵するマリアであったが、

そういうわけではなかった。

隣に座っているアーデスに語気を強くして問う。

「母上、どういっつもりですか？」

「どうもこっつも、マリアが説明がした通りじゃよ」

「では、なぜ性別を転換する理由をマリアに話していないのですか？」

性別を転換する理由？

腕を治すためではなかったのだろうか。

その言葉に問うようにアーデスへ視線を送る。

その視線に答えるようにアーデス言った。

「マリアの魂は、確かにエルフに適しておる。じゃが、数千年、数万年という時を

生きていく魂ではないじゃろ。その力を性別転換して宝玉に入れようと思って

たんじゃよ」

その返答の意味がいまいちわからないマリアだったが、カイトが補足をする。

「要するに、余分な魔力を宝玉にしまって、入らなかったその余りの魔力をわざ

わざ性別転換で消費するわけですね」

「そうじゃ」

「それは、マリアの意思ではないですよね？」

至極まじめに、けれど、どこか感情的なカイト。

「そうじゃな」

一方でアーデスは、相変わらず楽しそうだ。

視線をライトからマリアに移す。にやにやとした顔は、真剣な表情に変わる。

「マリア、きちんと説明せずにすまなかった。許しておくれ」

謝罪を述べるアーデスにマリアは、内心焦りながら返答する。

「いえ、気にしないでください。腕を治してくれるだけでも、十分な対価だと思って

ますから。それに、今ここで説明してくれるみたいですし」

その言葉に、「感謝する」と述べたアーデスは、その説明を始めた。

要点をまとめると、さっき言ったようにマリアの魂、もとい、魔力はともエルフの

体に合うものだが、人間の魂に変わりがないために、恒久的に生きるエルフの体

を手に入れてもその長さに精神が崩壊するか、人形のように感情がなくなっ

てしまうとのこと。そして、マリアを人間と同じ程度の寿命にするには、残りの寿命を

魔力として宝玉に保存するのだとか。ただ、それだけでは、目的の量を全て保存

できないので、残りの寿命を何かしらのエネルギーとして消費する必要があるら

しい。他に何か消費する方法はないのだろうか？そもそも、その残りの寿命はど

れくらいなのだろう。

「アーデス様、仮に性別変換しなかった場合の寿命は

どれくらいになるのですか？」

「そうじゃな。ざっと1000年くらいかの」

1000年、確かにその年月は長いかもしれない。そもそも、アンジェラ様が死ん

でからの世界に興味を持てるだろうか。

意識をせずに恐ろしいことを考えているが、その考えが以上であることは自覚していない。

男性になれば、アンジェラ様によってくる虫へのけん制にはなるけど、お世話を

することができなくなる。近くに変わらずおいては下さるだろうが。

「性別転換以外に何かエネルギーを消費する方法はないのですか？」

「そうじゃな。量が中途半端じゃからのう。ぱっと思いつくものはないかのう」

「そうですか。なら、それでかまいません」

アンジェラの居ない世界に興味のもてないマリアにとって長寿は何の意味も成さ

ない。それどころか苦痛であつた。男性になることは、とても抵抗があるが、この

際仕方ない。後は、最後に一つ確認しておくか。

「治してもらう前に、一つ確認なんですが、ハーフエルフになった私の魔力は今よ

り強くなりますか？なるとすればどのくらいでしょうか？」

その問いに少し訝しげるアーデスであつたが、素直に問いに答える。

「そなたの魔力は、もともと強いものじゃ。だが、人間の体にあつておらんゆえ、

今、発揮できる力は、持つてる魔力の10パーセント程度じゃ。エルフの体を得れ

ば、その魔力を100パーセント使うことができるじゃろうから、体感的には10倍に

はなるじやろうな」

自分の魔力が強いという返答には驚きだが、結果的に求めているものは得られ

そうなので、満足する。

「わかりました。ありがとございます。それでは、早速なんですが、左腕を治して

もらいたいのですが、お願いできますか？」

「そうじゃな、カイト。それでは、あとは頼んだぞ」

アーデスは、いままでマリアとアーデスのやり取りを見ていたカイトに頼んで、

さっさと寝室へ向かってしまった。

えっ、アーデスが治すんじゃないの？

その様子に呆然とするマリアを気の毒に思うカイトであった。

失恋

「それでは、左腕の治療を始めますか」

呆然と扉を見つめているマリアにカイトは声をかける。

その声に飛んでいた意識を戻す、マリア。

少しだけカイト様の苦勞がわかるような気がします。

心の中で同情をするマリアをよそに、カイトは治療に関しての説明を始めた。

治療もといハーフエルフになるには、エルフの血を体内に取り込むだけでいいら

しい。ただし、その血が体内に馴染むまでの数日は、高熱を出し、かなりの体力

を消耗するらしい。下手をすると死んでしまうらしい。

「覚悟はいいですか？」

「はい」

マリアの返答に、カイトは、ナイフで指先を切る。

ジワリと出てくる血は、人間と同じ赤色だ。

「どうぞ」

差し出された指に戸惑うマリア。

「どうかしました？」

その反応にやはりカイトはアーデスの息子なのだと感じる。

「えっと、これを舐めるんですか？」

恥ずかしそうに聞くマリアに、顔が赤くなっていくカイト。

地が白いだけに、赤くなっているのがすぐに分かってしまう。

「あなたに恥ずかしそうにされると、こちらまで恥ずかしくなってしまう。

早くしてください」

真っ赤になった顔は、ゆでたこみたいだ。

その様子に少し落ち着いてきたマリアは、ペロリとカイトの指をなめた。

程なくして、体中の体温があがってくる。

あつい。

ぐらりと視界が揺れ、暗転する。

なに・・・これ？

そのまま、マリアは意識を失った。

カイトは意識を失ったマリアを寝室まで連れて行く。

そして、かつて左腕があったはずの空間に意識を集中して、

新しい左腕を形成していく。そこには、水銀のようにゆらゆらと不安定な塊ができ

る。その塊から強い光が放たれ、マリアの体を包んでいく。しばらくするとそこに

は、男になったマリアの姿があった。

後は数日、魂が体に馴染むのを待つしかなかった。

ふう。っと小さくカイトはため息をつく。

茶色の髪にこげ茶の瞳は確かにマリアのものだ。しかし、ここに眠っているマリア

は、もう可憐な少女ではなく、まだあどけなさに残るものの確かに男だった。

身長が伸びたため、少しばかりベットが狭そうだ。ずれてしまった布団を戻し、部

屋を後にする。廊下を歩きながらカイトは、アーデスの憐憫の視線の意味を今更

ながら気付く。腕をなくし、尚も主人をまつすぐに思う彼女に魅かれていたらしい。

気付かなければよかった。自室にもどったカイトは、珍しく酒を飲んだ。

数日、彼女、いや、彼は熱に浮かされる。その間の看病をすっかりしなくてはと、

思いなおし、自分の恋心に蓋をする。酒の香りは、どこまでも甘かった。

エルフの長

カイトとマリアを後にして自室に戻ったアーデスは、実に上機嫌であった。

その原因は、先程の話し合いで見つけた次元の魔女の落とし物だ。

その落とし物はおもちゃのネックレスだ。カイトとマリアの前で壊したように見せた

が実のところ壊してはいない。ちょっとした幻を見せただけである。

「さて、連絡をとってみるかの」

そのおもちゃには、次元の魔女の魔力の残滓と居場所が記されていた。

アーデスは、精神を人間界にいる次元の魔女の元へと飛ばした。

意識を飛ばしたアーデスの前には、顔を真っ赤にして扉を見つめる黒髪の少女

が立っていた。面白そうなので、しばらくその姿を眺めることにした。

照れたり、怒ったりと忙しそうに百面相をしている少女は実に見ていて楽しかった

た。落ち着いてから後ろを振り返った少女は、アーデスを見てしばし硬直する。

それから、少しばかり面白くなそうにアーデスに問うた。

「いつからそこにいたの？」

「ふむ。頬を赤く染めて扉を眺めていたあたりかの」

少女はにやにやとしているアーデスにはあっと大きくため息をつく。

「そう。とりあえず、座っていいかな？」

精神だけとはいえ、立っているアーデスに遠慮したのか少女はたずねる。

「そなたの部屋じゃろう好きすればよい」

「それもそうだね」

そう言つて黒髪の少女はゆったりとしたソファに座る。

全体的に豪華な装飾が施されている部屋は、アーデスの好みではない。

「驚かぬのじゃな」

つまらなそうにつぶやくアーデスに、少女は呆れたように答える。

「そりゃ、自分で用意した道筋を通ってきた人なんだから驚く必要

もないでしょ」

淡々と答える少女にアーデスはさらにつまらなそうにしている。

「まあ、予想以上に早い連絡には驚いてるけど」

再びはあっと疲れた様に少女はため息をつく。

「そうじゃな。確かに少し早すぎたかの。」

久しぶりに外界のものと話せるものだから、はしゃいでしまったな」

10000年以上生きているが、外界の、特に人間と話すことは数千年ぶりだ。

ただ流れる世界を見るのは、つまらないからのう。

「そう」

少女は興味のなさそうに返事をした。だるそうに結び上げていた髪留めをするり

ととり、黒髪がフワリと舞う。少し癖のある髪は、いくらか外側にはねている。

アーデスは少女から感じる魔力に自分と近いものを感じていた。

「随分興味なさげじゃな。同じように長き時を過ごしたものとしては、

同意してもらえと思ったのじゃがのう」

その言葉に少女は、不思議そうにアーデスを見つめる。

「たしかに見た目以上に精神は歳をとっているけど、エルフほど長い時を過ごし

た記憶はないのだけれど。」

黒い瞳は決して嘘を言っているものではなかった。

なるほど。この魔女は気付いておらぬのだな。

それならそれでよかろう。

「そうか。それは失礼したの。して、次元の魔女よ。

エルフの長であるわらわに何用じゃ？」

エルフの長が直々に出迎えたのだからそれなりの用事なのじゃろう？

そうでなければ、つまらぬよ。

怪しげな笑みを浮かべアーデスは少女に問うた。

「まずは、お礼かな。マリアを保護してくれてありがとう。で、ここからが用件。

マリアと共に精霊界に行ったアンジェラを迎えに行つて欲しいんだ。アンジェラの

情報については渡すからお願いできないかな？」

アーデスの様子を窺うように少女は、見つめる。

「それは出来ぬな」

即答するアーデスに少女は訝しげに尋ねる。

「なんで？あなたほどの魔力なら簡単でしょ？」

確かにアーデスは、アンジェラ達が精霊界に来た時から、

その位置をある程度把握していた。しかし、次元の魔女がもう一人
精霊界に送っ

てからしばらくして、アンジェラの気配は綺麗に消えてしまった。
おそらく、守護の

宝石の類で気配が消されてしまったのだろう。

「それは、そなたが一番分かっておるのではないか？」

次元の魔女である少女が何をしたのかは知らないが、その原因が彼
女自身にあ

ることぐらいは、容易に想像がついた。

案の定、少女はバツが悪そうな表情をしている。

「はあ。やっぱりそうなるよねー」

ソファに豪快に背を預ける少女。そして、大きく伸びをする。

「まあ、いいや。何とかなるでしょ。」

あとさ、ついでに聞きたいんだけど、マリアって左腕なくなったの？」

その変わり身の早さに思わずアーデスは、声を出して笑う。

「なっ・・・なに？」

急に笑い出すアーデスに驚く少女。

「いや、久しぶりに声を出して笑ったわ」

アーデスは笑いすぎて涙目になっていた。

「そうじゃな。そなたは、マリアにどこまで聞いたのじゃ？」

笑いから回復し、少女に問う。

「んー。左腕を治すためにハーフェルフなるっていうのは知ってる」

何やらバツの悪そうな表情をしている。何か隠しておるのかのう。

「そうか。では、言うても問題ないの」

そう言ってアーデスは、マリアを助けた経緯を説明した。

その説明の内容は、大体少女の予想通りだったらしく特に驚くこともなく「そつ

か。」と言っただけだった。

「色々ありがとう。もう用件はとくにないかな」

「そうか。では、帰るとするかの。また気が向いたら連絡するゆえ」

「うん。それじゃ」

少女の別れを告げて、自室へと意識を戻す。

自室に戻って、アーデスはふと思い出す。そういえば、マリアが男になることを説

明していなかったのう。した方が良かったか悩んだが、このままの方が面白そう

だったので、アーデスは黙っておくことにした。

窓の外は既に暗くなっており、満月が出ていた。

出会い

熱い。体が熱い。

ボーっとする頭で体を起こそうとする。

「まだ、時間がかかります。もう少し眠っていてください」

そう言われると、冷やりとしたものが瞼をなでた。

そのままマリアは意識を再び夢に戻す。

十数人いる老人の中央に長い白髪の若い男がいる。

そして自分の隣には金髪の少女が立っている。幼い少女と私は見やり、

若い男は金髪の少女の方を指して言った。

「彼女が世界の柱です」

その言葉に私をこの場に連れてきた伯爵は、苦虫を潰したような顔をしている。

その模様を見ていた観衆から歓声が上がる中、伯爵に手をとられてその場を後

にする。その手は、乱暴で腕が赤くなっていた。

「お前はどこまで、この私を侮辱すれば気が済むのだ」

突き飛ばすように手を離され、柱に強く背中を打つ。

王弟と伯爵の娘の間に生まれた私は、王族から受け継がれるはずの魔力を持

たなかった。髪の色も王族特有の金髪ではなく、母である伯爵の娘と同じ茶色

だった。そして、その瞳の色は父である王弟とも母である伯爵の娘のとも違うこ

げ茶の瞳だった。そのせいで、母は不和の汚名を浴び自殺した。そのことが余計

に王弟の子でないという噂に拍車をかけ、伯爵家は衰退の一途をたどった。しか

し、そんな折に世界の柱の選定が行われた。その中で最終段階まで残ったの

が、金髪の少女と私だった。その私がここで”柱”に選ばれれば、伯爵家は再び

名誉を取り戻すことができた。しかし、わたしはその”柱”に選ばれなかった。その

ことに憤りを覚えた伯爵は、私を激しく折檻した。城内だけでも、

死角になって

いるそこは、だれも助けに来てはくれなかった。一通り折檻し、気がすんだのか

伯爵は私を置いてさっさと屋敷へと帰って行った。じんと痛むからだとは裏

腹に、伯爵から解放されたことに心は安堵していた。城を出ようと、予想以上に

ダメージを食らっていた私は、そのまま盛大に倒れ、意識を失った。

目を覚ました場所は、見たこともない場所だった。寝かされているベットはふかふ

かで、天窓がついている。痛む体にむちを打ちながら、体を起こし部屋の中を観

察する。どこもかしこも高そうな装飾が施されている。

「まあ、起きたのね」

隣の扉を開けて、やってきた金髪の少女は選定の場で隣にいた少女だった。

「あなた人気のない廊下で倒れていたのよ。体調は大丈夫？」

少女はそう言って心配そうに私を見つめる。

私と同じと5歳とは思えない大人っぽい話し方だった。

「大丈夫」

私の言葉に良かったと言い、彼女は問うた。

「あなた名前は？」

伯爵に置いて行かれた私に名乗れる名はない。

「帰る場所はあるの？」

何も答えない私に違う質問をする。

私はただ首を振った。帰る場所などない。

その様子に少女は少し考えてから、いいことを思いついたように言う。

「そう。それじゃ、今日からお友達になりましょう。」

それで、一緒にここに住みましょう。」

その顔は、天使のように優しく微笑んでいた。

とまどい

カーテンの隙間から入る朝日の眩しさに目を覚ます。

夢を見ていた。アンジェラ様と初めて会った時の夢だ。

アンジェラ様に拾われた後、専属騎士の配属に合わせて、私はアンジェラ様の専

属侍女として配属された。その話を耳にした祖父である伯爵が保護者として名を

あげたが、私の願いを受け入れたアンジェラによって、そのことはなかったことに

された。その後の私はアンジェラが用意した戸籍でマリア・エトワールとして生き

てきた。その名は私を拾ったアンジェラが名を名乗らない私に困り、呼び名として

つけたものだった。何でも大好きな童話の登場人物だとか。ちなみ戸籍上では私

は、王族の遠い親戚となっている。身寄りのなくした私を王が拾ってくれたという

ことになっている。

マリアはベッドから体を起こし、左手を見る。

確かになくなっていた左手は存在する。しかしその手はかつての見慣れたもので

はない。かつてのものより一回り大きく、女性特有の柔らかさはなく、かわりに男

性特有のごつごつした手だ。

本当に男になってしまった。

「ああ、目覚めましたか。」

様子を見に来たのであろうカイトが部屋に入ってくる。

その手には水差しがある。看病をしてくれていたのだろう。

「はい。ありがとうございます」

お礼を述べた声がいつもの声より低い。

「いえ。気になさらないください」

覚悟をしていたとはいえ、戸惑いを隠せないマリア。

その様子に心配そうに声をかけるカイト。

「大丈夫ですか？」

「覚悟はしていましたから、大丈夫です。」

ただ、今までが女性だったので、違和感がなんとも」

少し恥ずかしそうに言うマリア。

今まで少女であつた彼女は、きっとまだ男性の体など知らなかっただろう。

その男性になつた少女の戸惑いは、きつとかなりのものだろう。

「何か困つたことがあつたら言つてください」

体のことで分からないことは、きつと同性であるカイトに聞くのが一番だろう。

だが、ほんの少し前まで少女であつたマリアにその股間について、異常に元気なものについてはさすがに聞けなかった。

「はい。ありがとうございます」

「では、朝食ができたら呼びに来ます」

そう言つてカイトは部屋を出て行つた。

マリアは大きく息を吐く。

これはどうすればいいんだろう？

股間にあるものを布団越しに見つめ悩む。

5歳のときからずっとアンジェラの側に仕えていたマリアに男性のことを知る余裕

もなく、ましてや男性の体の生理現象など知るはずがない。

放っておけば戻るのだが、もちろんマリアはそんなことは知らない。

悩んでいると、ガチャリつとドアが開きアーデスが入ってくる。

「目を覚ましたのじゃな」

朝からテンションが高い。

「なんじゃ、まだ着替えておらんのか。着替え中だと思ってきたのにのう」

何だが、変なことを言っていた気がするが気のせいだろう。

まだそれほどアーデスにからかわれた経験のないマリアは、アーデスのことは

”優しいエルフ”と評価している。もちろん、その評価は近々、変わるのだが。

「あの、ありがとうございます」

左腕を治してくれたことに対してお礼を言うマリア。

「気にすることはない。それにしても、なかなかの好青年じゃの」
ずいっと顔を近づけてまじまじと見るアーデス。

その姿勢のせいで、服の隙間から胸の谷間が見える。

今までならそれほど気にならなかったのに、なぜか目が離せない。

ごくりと唾を飲み込む。

アーデスはマリアの視線が顔より少し下にあることに気付き、
にやりと口の端をあげる。

「少し前まで可憐な少女じゃったとは思えない反応じゃのう」
そう言っ、アーデスは服を少し引っ張り胸が更に見えるようになる。

マリアは、その行為にはっと我に返り、アーデスを見る。

その顔には、にやにやと意地悪な笑みが浮かべられている。

「あつ、いやつ、あの」

自分がしていた行為に気付き、顔を真っ赤にしてしどろもどろになる。

アーデスはその様子に軽快に笑う。

「よいよい。健康な男子の証拠じゃ」

そう言つてアーデスは、ちらりとマリアの股間をみる。

それに気付いてさらに恥ずかしそうに縮こまるマリア。

今までのマリアならその様子はかわいらしいものだが、

16歳の少年になった体では、その行為は少しばかり滑稽だ。

「母上っ！！」

ドアを勢いよく開け、アーデスを呼ぶ。

朝食ができたので、朝が弱いアーデスを起こしに行っていたカイト。

その部屋にいないことに気付き急いでマリアの部屋まで来た。

そして、予想通り顔を真っ赤にしているマリアがした。

「マリアは、性別が変わって戸惑っているのです。あまりからかわないでくださ

い。しかも、何で今日の格好はそんなに露出が多いんですか」

半眼になりながら、カイトはアーデスを責める。

普段のアーデスは首から足首までしつかり隠れる格好をしている。

ところが今日は、少しだけ胸の開いた半袖に、黒タイツ、

その上に短いショートパンツをはいている。

「久しぶりに遊んでおったら、面白い服装をしているものに会ったのでな、

真似をしてみたのじゃ」

くるりと回って、カイトに見せる。

その様子に深いため息をつく。

「朝食ができたので、早く来てください。冷めてしまいます」

そう言って、アーデスを連れていくカイト。

「マリアも準備ができたなら、来てくださいね」

アーデスを引っ張りながら、カイトはマリアに言った。

出て行く二人を見ながら、マリアは感謝した。

男になったことで塞ぎこみそうになった気持ちが上向きになっている。

朝から少し騒がしいけど、ちょうどいいのかもしれない。

朝食

アーデス達が出て行ってから、ベッドの横に綺麗に畳まれている服に着替えよう

と、服に手を伸ばす。寝巻のボタンを一つずつ外し、上着を脱ぐとその下にある

体には、今まで控えめなけれど柔らかい胸を支えていた下着がつけられていた。

今まで当り前のように思っていた体の丸みはなくなり、代わりに筋肉質な硬い体

に成り変わっていた。その体についている女性用の下着は、ものすごく変態ちっ

くだった。何だか、ものすごく虚しい。よくよく見るとベッドの横にある服が入っ

るかごに男性用の下着らしきものが入っている。今まで一度も見たことないそれ

を手にとり、思わず凝視する。女性物の下着とは違い、簡素で実用性に富んでい

るようだ。前面にある下着の穴は何なのだろうか？首をかしげ逡巡し、あること

に気付く。それは、男性にしかないものを取り出すためものと。未だに心は乙

女であるマリアは、なるべく自分の体を見ないように着替えることをこころがけ

る。いくら自分のものとはいえ、その股間にあるものを見る勇氣はなかった。

何とか着替え終わったマリアの出で立ちは、紺の首まであるタイトな長袖とすっ

きりとした黒緑のズボンというごくシンプルなものだった。今まで来ていたスカート

と違いズボンは脚に張り付くようで何だか気持ち悪かった。

この違和感にいつかは慣れるのだろうか？

再び落ち込みそうな気分を振り、アーデス達のいる部屋まで移動する。

「申し訳ありません。遅くなりました」

部屋の戸を開け、アーデス達に遅れた詫びをいれる。既に朝食に手をつけてい

るアーデスとは対照的にカイトは、また朝食に手をつけていなかった。その様子

に何だか二人らしいなと思いながら、待っていてくれたことにさらに詫びを入れ、

頭を下げる。

「本当に申し訳ありません。待たせてしまったみたいですね」

「いえ、好きで待っていたからですから気にしないでください」

頭を深く下げるマリアに少し困ったような表情でカイトは答えた。

「そうじゃ。さきに食べても良かったんじゃないから、気にすることはない」

アーデスは、楕円形にスライスされたパンに赤い果実のジャムを塗りながら、視

線だけマリアに移して答える。

「ありがとうございます」

二人の心遣いに感謝を述べ、アーデスの右隣に座る。円卓には、スライスされた

数枚のパンとヤギの乳、そして野菜のスープが置かれている。

「スープが冷めてしまいましたね。温めなおしてきましょう」

マリアと自身のスープを持って台所に向かうカイトにアーデスが「
ついでに温かい

紅茶をいれてくれ」と頼むが、「自分で淹れてください」とすげなく拒否される。

アーデスはぶつぶつと文句を言いながら席を立ち、ふと思い出したようにマリア

に「そなたの分も入れるかのう？」とマリアに訪ねた。マリアはそのお言葉に甘え

ることにし、お願いをした。しばらくして席に戻ってきた二人と一緒に和やかな朝

食をとる。マリアが全て食べ終わり円卓の上の皿が片付けられ、代わりに食後の

コーヒーが出される。コーヒーを口に含みホッとしていると、アーデスが今日の予

定について話し始めた。

「カイト、今日の身回りはせんでよいから、マリアの余分な魔力を神台に奉納され

ておる宝玉に移しておくれ。わらは予定が入っておっての」

「それは構いませんが、身回りはどうするのですか。今の状況ではないわけにも

いかないでしょう？」

言葉も口調も決してアーデスを避難しているわけではないのに、カイトがアーデ

スを避難しているような気がするのとはなぜだろう。

「それについては、もう当分大丈夫じゃ。代わりの者に頼んでおるゆえ」

にやりと不敵に微笑むアーデスは、とても綺麗だ。

「まさかと思いますが、あの人ではないですよね？」

珍しく^{たしな}窘めるのではなく、不機嫌そうに文句を言うような口調になつてい

る。カイトにそんな口調にさせる人物とはどんな人なのだろうか、と少しばかり興

味を持つ。

「そうじゃが？」

何が問題なんだと言わんばかりのアーデスにまたもや珍しくカイトは押し黙って

いる。おそらくだが、今回のアーデスの行動は特に理不尽でも強引でもないのだ

ろう。

「特に問題がないのなら、わらわはもう出かけるゆえ、マリアのことは頼んだぞ。」

ひらひらと後ろ手を振り、そのままアーデスは出かけて行った。なおも眉間にしわ

を寄せ押し黙っているカイトにマリアは声をかける。

「あの…」

マリアに気付いたカイトは、今までの厳しい表情を緩めてフワリとほほ笑む。

「すみません。少し考え事をしていました。今日は、母上が話した通り、

神台へと向かいましょう」

「はい」

「では、出かける準備をしてきますので、マリアも準備をお願いします」

「わかりました。では、準備が終わりましたら外で待っています」
それだけ言って部屋に戻り、外に出る支度をする。支度と言っても大したものではない

はなく、護身用のナイフと王城から持ってきた水筒を持っていくだ

けである。

すぐに準備がおわり、家の外でぼんやりとカイトを待つ。アンジェラ様は今頃何を

していつらっしやるのだろう。一回り大きくなった手が無意識に右耳のピアスに触

れる。ハーフエルフになった今なら、アンジェラ様を探せるかもしれない。目を瞑

り意識を集中するとぐらりと平衡感覚を失い、前に倒れそうになる。咄嗟に前に

足を出し、なんとか踏みとどまり、体制を立て直す。少女のマリアならそのまま踏

み止まれず倒れただろうが、男になったマリアの足腰は予想以上にしっかりして

いた。こんなことでも男になったことを意識するのかと小さくため息をつく。

「まだ魔法は使わないでください」

いつの間にか準備が終わっていたらしく、その場にはカイトがいた。カイトのいる

位置は、先程踏み止まれなければ、マリアが倒れていただろう位置に立って

る。偶然だろうか？

「なぜですか？魂は定着したのではないのですか？」

「確かに魂は定着しましたが、魔力の根源の一つである身体はまだ落ち着いて

いません。それに今まで使ったことのない量の魔力が使えるので、訓練せずに

使うと暴走しかねません。ですから、今はまだ使わないでください」

「わかりました」

カイトの忠告を素直に受け入れる。そのことに快くしたのか、にこりとほほ笑み

「それではいきましょうか」とマリアを連れて歩を進めた。その後ろから見る

白に限りなく近い水色の髪は、朝日に照らされ強く光を反射していた。

教師？

アーデスと散歩に行ったときも思ったが、本当にきれいなところだ。青々とした

木々の葉の間からは柔らかい光が漏れており、そよ風の香りは爽快な木々の香

りがする。人間界にはない魔力が満ちているが、決して不快なものでなくむしろ

清清しいくらいだ。

「どうかしましたか？」

カイトはいつの間にか歩みを止めてこちらを振り向いていた。

「いえ、アーデス様に散歩に連れて行ってもらったときも思ったのですが、

精霊界は、とてもきれいなところですね」

カイトに視線を送り、視線がかち合う位置が以前よりも高くなっていることに気づ

く。そんな些細なことさえ、自分が変わってしまったのだと思いき知らされる。

「そうですね。人間界は、魔界の瘴気も少なからず含んでいますか

ら、

あなたのような属性が光に偏っている方には、そのように感じるのでしょうか」

再び歩みを進め、カイトの隣に並んだマリアのこげ茶の瞳は、不思議そうに金色

の瞳を見つめている。

「私は光属性なのですか？」

確かにアルナートの魔女やアースに単色の魔力だとは言われていたが、

その属性は”光”なのだろうか。マリアの問いに顎に手をあててしばらく逡巡して

から、カイトは「光属性の水と言った方が正しいでしょう」と答えた。その回答に深

く考えず、そうなのかと納得し、礼を述べる。その後も適当な世間話をしながら歩

みを進め30分ほどすると、ひらけた場所に到着する。そこには、ぽつんと直方体

の台のようなものがあり、その台は無機質な岩で作られている。どうやらここが

目的地のようだ。カイトに促されてその台に近づくと、その側面に小さな赤い石の

ようなものが埋め込まれているのを見つける。左側面にある石をのぞきこんでい

たマリアは、向かい側から声をかけられる。

「そちらの宝玉ではなく、反対側についているこの宝玉を使用します」

台の右側面に立っているカイトの手には小さな青い石が握られている。

カイトの方へと歩みを進め、その手にある青い石を受け取る。直径2センチほど

のその青い石は、宝石のように輝くわけでもなければ、魔道具のように魔力を

纏っているわけでもなく、青の絵の具で塗りつぶしたただの石にか見えない。

強いて特徴をあげれば、まん丸な球であることぐらいだ。

「この宝玉にどうやって余分な魔力を入れるのですか？」

「その宝玉を体内に入れて少しずつ移していきます。」

左胸にその宝玉をあててください」

カイトに言われた通りに青い石を左胸にあてると吸い込まれるように体内へと取

り込まれる。それと同時にカイトが左胸の前に手をかざし、「動かないでください」

と言い、何かを口ずさむ。どくんと体中の血液が波打ち、視界が一瞬だけ暗転

するが体勢を崩すほどの長さではなかったらしく、すぐに光を取り戻す。

「これで終わりです。家に帰りましょう」

「終わりですか？」

予想以上の早さに目を瞬かせる。

「はい。後は宝玉に魔力の移動が終了するまでできることはありません」

「その魔力の移動はいつごろ終わるのでしょうか？」

「そうですね、十数日程度で終わると思います」

意外と日数がかかるみたいだ。この状態で魔法の練習をしてもいいのだろうか。

できるだけ早くアンジェラを見つけないとマリアは、その疑問を直接

口にする。

「その間に魔術の練習をしても大丈夫ですか？」

「もちろん、大丈夫です」

その返答にほつと胸をなでおろす。

マリアの質問が終わったことを確認したカイトは、マリアとともに家へと引き返す。

帰宅をして、部屋に戻ったマリアはこれからのことを考えていた。
どうやって魔術

の練習をするのか、体の不調なく魔術を使えるようになるにはどの
くらいの期間

が必要なのか、実際にどのくらいの距離で探索魔法が使用できるの
か、知れた

いことは山ほどあるが、帰宅後にカイトは用事があると出かけてし
まったため、と

りあえず後で聞くべき質問をまとめておく。少し外に出て散歩でも
行きたいが留

守番もかねているので、外に出ることはできない。窓から外を見る
とすでに太陽

が高く上っていた。少しお腹がすいたマリアは、部屋からでて地下にある貯蔵庫

へと向かう。アーデスやカイトに貯蔵庫にある食料を好きに食べていいと許可を

もらっていたマリアは、貯蔵庫の中にある食料を見ながら昼食の献立を立てる。

一応、三人分作ったほうがいいかな？三人分だとある程度の量が必要だから…

とぶつぶつと独り言を呟きながら貯蔵庫を漁っていると、上の階から声が聞こえ

る。その声の主は2人おり、1人はカイトなのだがもう1人の声の主が誰だかわか

らない。カイトが帰ってきたのなら、ついでに何か食べたいものがないか訊ねよう

と1階へと向かう。カイトたちがいるであろう居間の扉を開けた途端、勢いよく小

柄な少女が倒れこんできた。とつさに少女を受け止めて踏みとどまろうとするが、

体勢を保つことができずにそのまま後ろへと倒れこむ。ゴンツと小気味の良い音

と共に後頭部に衝撃が走り、その直後に打った場所に痛みが走る。

「っ…」

肩肘をつけて上体を起こし打った頭をさすりながら、お腹の辺りに顔をつつこんで

倒れている少女に声をかける。

「だいじょうぶですか」

その声に顔を上げた少女は、いまいち状況が把握できないらしく小首を傾げて

きょんとしている。栗色の瞳はくりくりと大きく、髪は薄い桃色でその長さは、腰

より10センチ程度短い。顔つきは幼く12、3歳ぐらいに見える。その幼い顔の鼻

が少し赤くなっているが、怪我はなさそうだ。無理やりどかすのも悪いので、少女

が状況を把握してその場をどいてくれるのをしばらく待つ。しかし、いつまでたっ

ても退いてくれる様子がない。いい加減、肘が痛くなってきたので、少女に退いて

くれるように声をかける。

「起き上がれないので、退いてもらってもいいですか？」

その言葉に顔を真っ赤にして、慌てて立ち退く。立ち上がるときに少女からふわ

りと花のようないい香りがした。

「すみません。怪我はありませんでしたか？」

いつの間にか近くに来ていたカイトが少女の代わりに謝罪を述べ、手を差し伸べ

る。礼を述べて、素直にその手をとって立ち上がると、横に避けていた少女がそ

の頬を上気させて何か口走っていたがよく聞き取れなかった。カイトに導かれ

て、少女とマリアは居間にある椅子へと腰を下ろす。

「帰ってきて早々お騒がせてすみません」

本来なら謝罪する必要のないカイトからの謝罪に苦笑いしつつも、あたり障りの

ない回答をしておく。

「いえ、大怪我したわけではないので、気にしないでください。

ところでそちらのかたはどなたですか？」

カイトの隣の席で俯いている少女に視線を一瞬だけ移して質問をする。

「木の精霊で、名はサクラと言います。あなたに魔術の練習

を見てくれる教師役として紹介するつもりで連れてきたのですが…」

カイトはちらりとサクラを見てから、その手を額に当て大きくため息を吐く。その様

子に隣にいたサクラはビクリと体をゆする。その光景に遠い昔の自分を重ねたマ

リアは、意識せずに優しい声音で話しかける。

「そうですか。サクラ様、ご教授お願いいたします」

マリアの言葉に大きな栗色の瞳がさらに大きく見開かれ、小さな声で「私なんか

でいいの？」と呟いた。

「もちろんです。サクラ様が私の教師役に選ばれたのには、

正当な理由が存在しているからですよね？」

前半はサクラに、後半はカイトへと向けられたものだ。

「それほど大げさな理由ではありませんが、そうですね」

カイトはマリアの質問に答えた後、サクラに自分で自己紹介をするように促す。

それを受けて、サクラはもじもじしながらも何とか自己紹介をする。

「桜の木の精霊で、サクラと言います。えっと、さっきはぶつかってごめんなさい」

「いえ、たいした怪我はしていないので、気にしないでください。

私は、マリア・エトワールと申します。これからよろしく願います」

小動物のようにびくびくとしているサクラをできるだけおびえさせないように

心がけながら挨拶を済ませる。

「ところで、桜の木はどういった種類の木なのですか？」

一度も聞いたことのない種類だったので興味本位で聞いてみると、サクラの代わ

りにカイトがその質問に答えてくれた。

「この世界のどこにもその種類の木は存在しません。

彼女は異世界の精霊ということになりますね」

「異世界ですか？」

予想をしていなかった方向に話が進み、今度はマリアが目を瞬かせ
る。

「はい。サクラは何らかの原因でこの世界に迷い込んでしまったの
です。そして、

途方に暮れていたサクラを母上が拾ってきて世話をしていたんです」

その話を聞いて容易に、アーデスが上機嫌でその少女を家まで連れ
てきた様子

が思い浮かんだ。おそらくいきなりカイト辺りに脈絡もなく惚れた
はれたの話を

ふって、胡散臭そうに笑っていたに違いない。そして、何かあると
確信したカイト

がアーデスの後ろに隠れるように立っている少女を見つけて、「ど
なたですか？」

とどこまでも良識的な質問をして、アーデスに一言「拾ってきた」
とか言われて盛

大にため息をついたのだろう。そこまで想像して、目の前に座って
いるカイトの苦

劣に対して少なからず同情する。

「サクラは今でこそ、この世界で精霊としてその力を行使することができます

が、ここに来た当初は存在すら危うい状態でした。そして、精霊の力を行使する

上で、異世界であるがためにその使い方にも色々と違いがあります。その状況

が人間からハーフェルフになったあなたと似ているので、その経験がある彼女に

教師を任せたのです」

カイトの説明をおとなしく聞いていたサクラが思いもよらないことを発言した。

「そうなの？わたし、何も聞いてなかったよ。

アーデス様にただお願いされただけだから」

カイトはその反応を予想していたのか、特に驚くわけでもなく答える。

「そうでしょうね。母上は自発的に聞かない限り、ほとんど情報をくれませんか」

カイトの顔は笑っているが、目が笑っていない。その様子に気づい

たのかサクラ

は下を俯いて「ごめんなさい」と謝罪を述べる。多分、この目が笑っていない理由

は、サクラのせいではないだろう。少し不穏な空気が流れているので、話題を変

えようと適当な疑問を口にする。

「あの、桜の木の”桜”とは、花が何かなんですか？」

あまり頭の中を整理していなかったので、どことなく質問が変になっている。ちゃ

んと伝わっているだろうか。

「この家の近くに植えてあるので見に行きますか？」

「えっ、あるんですか？」

「はい。母上がサクラと共に見つけて世話をしていましたから」

よくよく考えれば簡単なことだ。そもそも精霊なんだから、本体なくしてこの世界

に存在することはできない。一人納得していると、カイトに「見に行きますか？」と

再び同じ提案をされる。特に断る理由もないので、見に行きたいと

いう意思を伝

えて、3人でその桜の木がある場所へと向かう。

家を出て5分ほど歩いた場所に、1メートル程度の小さな木が植えられていた。こ

ういう大きさの種類なのだろうか。マリアの心うちの疑問に答えるようにサクラが

話し始める。

「えっと、この木はまだ成熟していなくて小さいけど、ここにある他の木みたいに

大きく成長します。時期があっていないので、まだ桜の花を見せられないけど、

小さくてかわいい花が咲きます」

たどたどしく話している様は、その幼さを強調している。

「花の色は私の髪と同じ色なんですよ」

サクラは薄い桃色を一房ほど掴んで、えへへと笑うその頬にはえくぼができて

いる。サクラに歩み寄り、視線を合わすためにひざをつけて屈む。

「きれいな色ですね。早く花が咲くところを見たいです」

にこりと笑顔を作って、髪を見ていた視線をサクラの視線に合わせると、サクラは

顔を真っ赤にして俯いた。そういえば自分は男だった、近づきすぎて怖がらせた

かもしれないと思い、立ち上がり距離をとろうとした。しかし、服の裾を掴まれて

動きを静止したため距離をとることはできなかった。動きを静止した原因である

サクラは、勢いよく顔上げて満面の笑みを浮かべて

「ぜひ見てください」

と言った。その表情は花のように可愛らしいものだった。

講義

第20話 世界の柱（マリア）

マリアは朝食を終え、頼杖をつきながらのんびりとサクラが訪れるのを待っている

た。昨日、サクラたちと桜の木を見た後は、カイトは用事があるらしく出かけてし

まい、また、サクラもカイトからマリアの体の状態を聞いており、今日は魔術の訓

練をすべきではないと言って帰ってしまった。特にやることなくなったマリアは、

その日は、家中の掃除と晩御飯を作って一日を潰した。そして、今朝はアーデス

が嫌がるカイトを連れて出かけてしまった。特にやることもないマリアは、男に

なっってから起きる体の現象について考える。男なって二日目、相変わらず股間に

あるそれは、起きると元気になっていた。昨日は色々しているうちにおさまった

し、今ももうおさまっているが、”あれ”は毎朝のように起きる現

象なのだろうか。

それとも何かの病気であつたりするのだろうか。カイトやアーデスあたりに聞けば

すぐにでも答えをもらえそうだが、どちらに聞くのも気が引ける。
アーデスは女性

だし、一応今は同性であるカイトに聞くのが妥当なのだろう。でも、正直、まだ男

だと言う自覚がない。意識せずに「はぁ」っとため息がでる。話し方は、もう敬語で

話しているから、男でもそれほどおかしくはないだろうが、ちょっとした仕草が女っ

ぽいのは治したほうがいいだろう。どう考えても気持ち悪い。悶々と考えている

と、どうやら待ち人が来たらしく玄関の方から控えめなノックの音が聞こえた。扉

を開けると予想通り、薄い桃色の髪をした少女がたっていた。

「いつらっしやいませ。待っていました、中へどうぞ」

「失礼します」とだけ言って、サクラは素直に家の中へと入ってくる。そのまま居

間に案内し、お茶を用意しながらマリアは思う。誰も居ない家に招き、お茶まで準備して、何だか自分の家のような振る舞いだな、と。準備したお茶をサクラに出し

てから正面の席へと座る。サクラはきよろきよると回りに視線を巡らしている。どう

したのだろう？

「どうかしましたか？」

そのまま疑問を口にするとサクラは、恥ずかしそうに答える。

「あつ…あの、家にアーデス様もカイト様もいないんですね」

「はい。二人だけです」

特に何も意識せずに放った言葉にサクラの白い透けるような肌が真っ赤になる。

そこでマリアはこの少女の言わんとしていることをやっと理解し、苦笑する。ま

た、自分が男であることを忘れていた。サクラがくるほんの少し前まではそのこと

をととても意識していたのに。サクラの意識を逸らそうと全く違う方向性の話を降

る。

「魔術の訓練は、いったいどういったことをするのですか？」

その質問に小さく息を吐き、軽く頭を振ってからサクラは、話し始めた。

「えっと、今日はまだ本格的に何かをするつもりはないです。その、体の調子が

完全な状態でないので、少しこの世界の魔術についてと、エルフの体と人の体の

違いについて話そうと思ってます」

考えを一生懸命に言葉にしようとしているサクラの頬は、先ほどとは違う意味で

上気している。

「そうですか。ちなみにどれくらい立てば本格的な訓練ができるようになりますか？」

か？」

「ええっと、いつかはわかりません。でも、そのマリア様の纏う魔力が安定すれば

できます。今日は、まだ不安定です」

「そうですか。わかりました。では、本日はご講義おねがいたします」

にこりと笑みを作って、サクラへと講義をお願いする。この行為に緊張してしまっ

たのか、「ははっ、は、はいっ」と囁んでいた。その様子をほほえましく思いなが

ら、マリアは少しばかり気になっていたお願いを口にする。

「様”はあまりなれていないので、それ以外の呼び方でお願いできませんか？」

「あっ、はい。……マリアさん」

俯き加減に顔を赤くしながら上目遣いで名前を呼ばれ、不覚にも心音が早鐘を

打つ。できるだけ、そのことを悟られないように話を続けるように促す。

「ありがとうございます。話ができてしまいましたね。それでは、ご講義お願い

いたします」

その言葉に、サクラは大きく息を吐いてから「はい」と静かに答え、話始めた。

「ええつと、まず始めに、魔術について話します。魔術は…」

そこから頭の中を整理しながら、ゆっくりと話す。普段からあまり話さないほうな

のか、所々囁んでいた。サクラの話をまとめると、魔術には大まかに2種類あり、

それはエルフの”魔法”と魔族の”魔法”というものらしい。前者は”精霊魔法”とも

呼ばれ、光属性に分類される。後者は、血に宿る魔力で無理やり現象を捻じ曲

げて使っているらしく、要は力技で闇属性なんだとか。ちなみに人間はどちらもほ

ぼ均等に持つており、その差異が魔力として認識される。そこでマリアは一つの

疑問を抱く。

「精霊魔法は血に関係しないと仮定すると、私はなぜハーフエルフという分類に

なるのでしょうか？」

カイトに血を分けてもらったときは、その血に宿る魔力を取り入れることで魔力が

融合され、ハーフエルフとして分類されるのだと解釈していた。でも、エルフの魔

法が”血”と関係しないとするとそれは、意味のないことのように感じる。

「んつと、それを説明するのもエルフと人間の違いについての話になるから、それ

に答えるのは、先に進めてからでいいですか？」

何がどう関係してくるのか予想はできないが、とりあえず了承をして話を進めても

らう。了承を得て、サクラは再び話し始める。

「…ええと、人間とエルフの違いなんですけど」

相変わらずつつかえつつかえだが、一通り人とエルフの体のつくりについての説

明をし終える。再び、サクラの話をまとめると、人間は”生”を受けてその体に魂

を宿すが、エルフはそもそも世界に満ちている光のエネルギーを集めて具現化し

たもので、その存在は人間とは根本的に異なっている。人間の誕生は、万物の

生物と共通しているが、エルフは精霊王が光エネルギーを集めて生成し、誕生す

る。そのため、生まれながらにして成人しているのだとか。それで魔力とエルフの

血がどう関係してくるのだろうか。

「それとエルフの”血”を分け与えることによってハーフェルフになるのと、

どう関係があるのですか？」

「……………」

サクラは、眉間にしわを寄せ、俯き、頭から何かをひねり出すよう少しずつ言葉を

発した。

「えっと、さっき言ったように、エルフの存在はエネルギーそのもので、その、エル

フを構成しているものは全て、エネルギーです。だから、その血もエネルギーで

魔力の塊みたいなものです。えっとだから、……………」

再び口を閉じて逡巡するサクラにマリアは、大体理解できたことを

伝える。おそら

くだが、体の構成要素の一部である血は、生命として確立するにはかなり重要で

ある。生命でなくとも、それを模したような存在のエルフの血も同じように重要で、

それなりに魔力も宿しているということなのだろう。ただ、生命の源でも、魔力の

源でもないと言うだけで。そのエネルギーを私の”血”を媒介に体内に取り込んだ

のだろう。ここまでわかれば十分である。笑みを作って講義に対して礼を述べる

と、「カイト様に教わったことをそのまま話ただけだから」と答えた。そして、その

違いによる魔力の駆使の仕方の説明へと話に移ろうとしたとき、勢いよく玄関の

扉が開いた。

「今、帰ったぞー」

どこのおっさんだよ、と感想を漏らしたくなるような気の抜けた台詞だが、育ちの

良いマリアも純粋なサクラもその台詞に大した疑問も抱かずに玄關へと向かう。

そこには、予想通り若葉色の髪をもったエルフの長、アーデスとその息子のカイ

トの姿があつた。

「お帰りなさい。アーデス様、カイト様。用事はもう済んだのですか？」

「いや、まだじゃ。腹が減ったから昼にしようと思って帰ってきたんじゃ。」

サクラが帰る前に顔を見ておきたいしのう」

予想通りの返答をしたアーデスは、その視線を左下に移動しニヤリと笑う。

「久しいのう。サクラ」

アーデスに見つめられ、サクラは茹蛸のごとく顔を真っ赤にしている。

「はい」

恥ずかしいのか隣のマリアの服を掴み、後ろへと隠れる。その様子にさらにニヤ

ニヤと笑みを浮かべるアーデスに、どこことなく嫌な予感がする。

「なんじゃ、もうマリアになついたのか。なかなかの好青年じゃからのう」

その言葉にサクラは慌てて手を放し、さらに顔を赤くしながら必死に否定をする。

そこまで否定されるとさすがに傷つくなあつと苦い表情をしているとカイトに同情

の眼差しを投げられる。ひゃあつと甲高い短い悲鳴がしたと思つたら、恥らうサク

ラのあまりの可愛さに抱きつくアーデスの姿が視界に入る。その最中「愛い奴

じゃのう」とか言っており本格的にエロ親父と化している。その様子を生暖かい瞳

で眺めていたが、抱かれているサクラがその豊満な胸に顔を突っ込んでおり、息

苦しそうなので止めに入ろうとする。

「母上、あまりきつく抱きしめるとサクラが窒息してしまいますよ」

同じこと考えていたらしいカイトが先にアーデスをとめに入る。

「なんじゃ、まだいたのか。早く昼食の準備をしてこぬか」

声をかけられたほうに視線を向け、つまらなそうに言葉を放った。その様子に大

きくため息をつき、未だに放そうとしないサクラを引き剥がす。自由になったサク

ラは、そのままマリアの後方へと隠れる。

「なんじゃ、わらわよりマリアが良いと申すのか」

サクラの行動に口を尖らすアーデスに、大きなため息をつくカイト。

「では、昼食の準備をしてきますのでサクラをお願いします」

マリアにそれだけ言つとそそくさと台所へと向かった。マリアは、相変わらず不機

嫌そうに口を尖らすアーデスと濃厚なスキンシップを恐れて後方に隠れているサ

クラに挟まれながら、どうやってこの状況を打開するかを考えていた。

再会

マリアと離れてから、一日がたった。影縫いのせいで動くことのできなかつたアン

ジェラは、諦めて静かに座っていた。もう少しで影縫いの効果が切れる。もともと

世界の柱に選ばれる程の魔力の持ち主ゆえ、回復していくとともに予定より早

く影縫いの効果が薄れていく。マリアは大丈夫だろうか？神経を集中しマリアの

魔力の後をたどるが途中で途絶えている。何もなければ死んでしまったのでは、

と不安になるが、お互いの安否を知らせる装飾品が耳につけてある。ピンクダイ

ヤで出来たピアスだ。マリアは右の耳に、アンジェラは左の耳につけている。そし

て、どちらかが死ねば、ピンクダイヤのピアスは消滅する。そつと、左の耳に手を

あて、アンジェラは安堵する。マリアは死んではない。魔力の残滓が途中で途

絶えているのは、気になるがあの状況で生きているだけよしとしよう。戦いに関し

ては何の訓練もしていない二人が生きていること自体が奇跡なのだから。ふと影

に視線を落とすと影縫いの釘が消滅していた。どうやら効果が切れらしい。ア

ンジエラは、立ちあがりとりあえずマリアの魔力の残滓を追いかけることにした。

もちろん、まだ魔物が生きている可能性はあるが、ある程度回復したアンジエラ

にとってあの程度の魔物は雑魚に等しい。魔力が完全に回復していたなら、魔

力の残滓など追わず、直接マリアの魔力を探索したことだろう。しかし、未だ完全

に回復していない上に、おびただしい量の魔力が充満しているこの森で、マリア

個人の魔力を探すのは困難であった。それであれば、ある程度逃げた方角を限

定できる魔力の残滓を追いかけた方が楽である。まだ少し残る倦怠感を感じな

がら、アンジェラはマリアの逃げた方向へと進む。しばらく歩いて
いると、マリアを

追いかけていたであろう魔物たちの残骸を見つける。そこにある魔
物の残骸は

ひどいものだった。何か鋭いもので強い衝撃を腹に当てたのだろう
か。そこにあ

る魔物全てがえぐり取られてように腹部がなく、本体と少し離れた
ところに臓器が

散乱していた。その光景に思わず口を抑えるが、ふと疑問に思う。
匂いがしな

い。臓器の匂いなど嗅いだ事はないが、何かの本に時間がたって放
置された臓

器の腐敗臭はすさまじいものだを書いてあった気がする。なんと
く意味がある

ように思えた。気分が悪くなるのは堪えながら、辺りを見渡す。す
ると、左手側の

奥の方から強いマリアの魔力の残滓を感じた。急いでそちらまで走
っていくと、そ

こには、おびただしい量の血痕が残っていた。不意に不安になり、
左耳に触れ

る。確かにそこには、ピアスが存在している。まだ死んではない。でも、これが

ら、このピアスが消えてしまう可能性は十分にある。このピアスから分かるのは

生死だけ。容態まではわからない。急激にこみあげてくる不安に押しつぶされそ

うになりながら、さらに辺りを調べる。そしてアンジェラはあることに気付いた。初

めに見つけた血痕以外どこにも、血痕が存在しない。ここから移動したのなら間

違いなく、血痕が残るはずだ。これだけの出血量で、血を一滴もこぼさずに移動

なんてできないはず。いや、一つだけあった。それは、私たちが王城から逃げた

ときに使用して手段、空間転移だ。だとすると、マリアの魔力の残滓が途中で途

切れているのも納得できる。マリアは誰かに連れて行かれたと考えるのが妥当

だろう。その人物はマリアの味方なのだろうか。そもそも人なのだろうか。マリア

は生きている。そして連れて行ったということは、仮に敵だとしてもすぐには殺さ

れないだろう。それでも出来るだけ早く見つけ出すことには、相違ないけど。

突然、ビリッと空間が歪み、耳元で嫌な音がした。

「アンジェラ様」

不意に後ろから聞き覚えのある声と呼んだ。

振り返るとそこにいたのは、アンジェラの専属騎士であるシン・ルシュバリエで

あった。青みがかった黒の髪が日に照らされ、鈍く光っている。

噂の魔女

「シン。なぜあなたがここにいるの？」

突然現れたアンジェラの専属騎士シン・ルシュバリエ。

「アンジェラ様が使用した転移の魔方陣を利用してここまで来ました」

アンジェラは驚きのあまり絶句する。

確かに魔方陣は消さずにこっちまで来た。でもそれは、その魔法陣を駆動するほ

どの魔力をもつものが、自分以外にいないからである。

「シン、あなたはあの魔法陣は使えるの？」

信じられないと言った感じでアンジェラが尋ねる。

「いいえ。駆動したのは私ではありません。ソフィアージュ殿です」

そう、彼をここまで送ったのを手助けしたのは確かにソフィアージュだ。しかし、もし

この場にソフィアージュがいたなら、間違いなく転送を施したのは自分ではないと

いったたろう。そして、厳密に言えば、魔法陣に残っていたアンジエラの魔力を利

用して送ったのだから、アンジエラが転送したということになる。と言っていたに違

いない。

「ソフィアージュ？それは一体何者なの？」

聞いたことのない名前だわ。

そんな見ず知らずの人がなんでいきなり出てくるのかしら？

「そうですね。彼女の名前より通り名の方が有名かもしれません。」
”アルナートの

魔女”をご存知ですか？」

「ええ。聞いたことあるわ」

アルナートの魔女なら、侍女たちの噂で聞いたことがある。その身に宿す魔力

は、皆無にも関わらず、難解な魔法陣をいとも簡単に作成し、魔法を行使する魔

女。確か、10日前ぐらいにヴァン兄様が、面白そうだと言って、会いに向かった

方よね。所詮、噂だと思っていたのだけど、まさか…。

「ソフィアージュ殿は、その”アルナートの魔女”と呼ばれているご本人です」

ああ、やっぱり。噂に違わず、素晴らしい魔女だったのね。

「それで、私を連れ戻しに来たの？生憎だけど、帰るつもりはないわ」

マリアとはぐれて、生死以外の安否が分からない状態だというのに、のこの帰

れるわけがない。精霊王に会えず帰ることになっても、マリアを連れも出さなければ。

ば。

「確かに王の命では連れ戻すことですが、ヴァンペール殿下とソフィアージュ殿の

命は、アンジェラ様に会ったら、マリアと合流すること、そして、アンジェラ様の目

的を遂行する手助けをすること、受けています」

絶対に帰らないと意志を固め、シンを説得する姿勢に入っていたアンジェラは、

拍子抜けする。

「それと、ソフィアージュ殿からアンジェラ様に伝言がございます」
伝言？会ったこともない人から？

「何かしら？」

「マリアは無事で、エルフの村にいる。とのことですよ」

”マリアは無事”

その言葉に張っていた気が一気に抜ける。

シンは、いきなりガクンと膝を折ったアンジェラを受け止める。

「アンジェラ様。大丈夫ですか？」

「ごめんなさい。マリアが無事だと聞いて、気が抜けてしまったの」
うふふ。と力なく笑う。

少し休憩したとはいえ、未だにとれない倦怠感とマリアのことで気持ちを持ち張っている

いたアンジェラは、自分が予想以上に疲れていることに気づく。

「もう日が暮れます。場所を移動して休みましょう」

前のめりに預けていた体が不意に浮く。

「きゃあ」

気付くとシンにお姫様だっこされていた。

「シン、自分で歩けるわ。降ろしてちょうだい」

恥ずかしさのあまり、体中が熱くなる。

「お断りします。いたずら好きな姫は、捕まえておかないと何をするかわかりませ

んから」

何も言わずに、城を飛び出たことを非難するような口調だった。

シンがこういう軽口を言う時は、後でたつぷりと説教をされるのだ。

そう言えば、最近はずっと大人しくしていたから、説教は久しぶりね。

諦めてシンに体を預け、懐かしい匂いにさらに体温が上がるのを感じた。

探索

川のほとりで一夜を明かした、アンジェラとシンは簡単な朝食を済ませ、これから

どうするかを相談していた。

「ええと、そのソフィアーージュの話によると、マリアはエルフの村にいるのよね」

シンから得た情報を頭でまとめながら、確認する。

「はい、そのように伺っています」

ソフィアーージュの問いに答えるシン。

「で、どこにあるの？そのエルフの村は？」

肝心のエルフの村の情報を聞いていないアンジェラは、当然の如くシンに尋ね

る。その質問にすまなそうにシンは答える。

「わかりません。ソフィアーージュ殿にも、

尋ねたのですが”わからない”とおっしゃっていました」

その答えに、ため息をつく。

それじゃ、探しようがないじゃない。

右も左もわからない世界で、場所の名前だけで探せるわけがない。どうせなら、きちんと行く方法まで教えてくれればいいのに。

お角違いである思いをソフィアーージュに抱くアンジェラ。

「アンジェラ様。マリアの魔力の探索は、出来ないのですか？」

普段ならそれで十分だろうが、いつまでたっても消えない倦怠感。

そのせいなのか、魔力が本調子でないのだ。

「それは出来ないわ。調子が不安定で」

その言葉にを聞いてシンは、”荷物入れ”から、中央に小さなイエローダイヤが施

されている質素な、けれど上品なネックレスを取りだした。

「それは、アル兄様の…」

そのネックレスをみて、アンジェラは自分とは対照的な深紅の瞳を持つ

兄を思い浮かべる。

「はい、アルベルト殿下がアンジェラ様の10歳の誕生日に

プレゼントなされたものです」

そう言って、シンはアンジェラの後ろに回りネックレスを取り付ける。

その近さに体温が上がるのを感じる。

耳が赤くなっていないかしら。

「できました」

そう言って、シンはアンジェラの正面へと戻る。

10歳の誕生日に、アル兄様がくれたネックレス。

何を勘違いしたのか、依頼された宝石商は、10歳の私には大きすぎるネックレス

を作っていた。それでも、何も言わずに受け取り、嬉しくて毎日眺めていたことを

思い出す。

「気分はどうでしょうか？」

いきなり要領の得ない質問に？マークを頭に浮かすアンジェラ。

疑問に思いつつも、いつの間にか倦怠感が取れたことに気づく。

「そうね。だいぶ良くなったわ」

「そうですか。実は、ソフィアージュ殿から、アンジェラ様の調子が悪そうだった

ら、渡してくれとお願いされていたんです」

アルナートの魔女はどこまで先の状況を予想しているのだろうか。

「そう。でもなぜ、ネックレスをつけただけでこんなに調子が整うのかしら？」

「それは、私にもわかりません」

実は、それは魔女自身もよくわかっていなかった。

ただ、その方がいいような気がした。それだけである。

「そう。分かれば、対策出来ると思ったのだけど、仕方ないわね」

そう言ってアンジェラは、マリアを探すために目を瞑った。

青色の澄んだ魔力、それがマリアの魔力。

他の人の魔力と違って単一色の魔力は、実はかなり珍しい。

静かに目を閉じ、じっとしているアンジェラ。

シンは、そのアンジェラを守るように周囲に意識を張り巡らせていた。

そつとアンジェラが目を開け、シンにマリアの位置を伝える。

その位置は、精霊界の中心にあり、自分たちは精霊界に西の端にいる。

距離的なことは感覚的にしか分からないが、おそらく人間界で言う
と西の端の砂

漠から東の外れにあるアルナート領まではあるという。その距離は、
馬を使って

順調に行っても半年はかかる。

「ねえ、シン。16歳の誕生日までに着くかしら？」

「わかりません」

でも、どうにかなるような気がするわ。

口には出さないが、そう直感的に感じるアンジェラ。

その直感は正しいことが、後々分かるのだが、それはもう少し先の
話である。

休憩

シンと合流して、エルフの村に向かってから、1週間が経とうとしていた。

アンジェラがいるとはいえ、結構なハイペースで進んでいた。

それにも関わらず、エルフの村からアンジェラ達の距離は一向に縮まなかった。

出発当初の気楽な気持ちはいつしか消え、少しずつ焦りがアンジェラを支配して

いく。一方、シンは、最悪の場合、すなわち、アンジェラがエルフの村に誕生日ま

でに着かないことを想定して、すこしでもアンジェラの体力を温存することを優先

していた。

「アンジェラ様、本日はもう休みましょう」

無理をしてペースを上げていたアンジェラは、もうすでに息も絶え絶え（たえだえ）である。

「何を、……言ってるの？……まだ、昼よ」

球のような汗を流し、話すこともやっとだった。それでも、進むこ

とを主張するアン

ジエラに、シンは妥協案を出す。

「では、昼食にいたしましょう。途中で倒れてしまったては、本末転倒です」

シンの言うことは、正しいわ。今、無理をして倒れてしまったては、これまでの移動は、何の意味もなさない

「……………そうね」

アンジエラの諦めたような返答にシンは安堵する。その後、少し開けた場所へ移

動し、腰をおろす。シンは荷物入れから、簡易食料を取りだし、アンジエラに

渡す。棒状のクッキーのようなもので、味はチョコレート風味だ。食べ始めた数

日間は結構おいしいと感じていたそれは、時間が経つにつれて苦痛になってい

た。しかし、食べないことには、体力が回復しないので、仕方なく食べる。

「アンジエラ様、よろしければお飲み下さい」

花の香りのする紅茶を受け取る。

いつの間にこんなものを作ったのかしら。

シンの周りを見ると、いつの間にか、野営の準備が済まされていた。もちろん、ここで今日の移動を終了するつもりのないアンジェラは、文句を言う。

「シン。これはどういうこと？昼食をとるだけではないの？」

想定内の質問に淀みなく答えるシン。

「アンジェラ様が私の手を借りずに立つことが可能であれば、昼食後に出発いた

します。しかし、出来ないのであれば、今日はここまでです」

その言葉にアンジェラは、嵌められたことに気づく。

意地で、一人で立ちあがろうと手をつき足に力を入れるが、

腰を浮かすことすらできない。アンジェラにできるはずがなかった。

筋肉痛で痛む足に、疲労からほとんど回復していない体。

そんな状態で数日過ごし、先日の昼食以降からは、

シンが手を貸さない限り立ちあがれなかったのだから。

嵌められたことに、怒りシンを睨むアンジェラ。

無言の抵抗にシンは、ため息をつく。

「こうでもしなければ、あなたは、死ぬまでこのペースを崩さないでしょう」

腰をおろしていたアンジェラに視線を合わせてさらに続けた。

「いくらソフィアージュ殿から頂いた”荷物入れ”に様々なものが入っていたとして

も、疲労は、十分な休息を取らなければ回復しません。その状態であなた方が

襲われた魔物が出た場合に、対応しきれません」

再びシンに正論を言われ、視線を落とすアンジェラ。

しかし、そのアンジェラの顔を両手で包み、グイッと顔をあげ、外した視線を無理

に合わせる。その行為に驚き、目を見開くアンジェラ。

「あなたに何かあった場合、私はマリアに何と云えばいいんですか？」

その言葉にアンジェラの瞳が揺れる。

「なにより、あなたに何かあった場合、私が悲しみに暮れて死んで

しまいます。

ですから、今日はここで休みましょう」

そう言ってシンは顔からそっと手を放し、アンジェラを立ちあがらせる。

そのままテントへと誘導され、寝袋に入る。

寝袋に入ったアンジェラは独り考える。

最後の言葉は、どういう意味なんだろう？

少なからず、好意を抱いてくれているのは、わかる。

でもそれは、主人としてなの？

それとも………

そこでアンジェラの意識は夢の中に堕ちた。

魔物に遭遇

辺りはすっかり暗くなり、静かな夜が訪れていた。

昼食を食べた後からずっと眠っていたアンジェラは、のどの渇きに目を覚ます。

何か飲もうとテントから出ようとして、妙な気配に気づく。

その気配に意識を集中すると、それはかつてマリアと居るときに遭遇したもの

だった。一気に緊張するアンジェラ。

一方、外で仮眠を取っていたシンもまた、その気配に気づく。

慎重にテントまで移動し、アンジェラの様子を確認する。すると、テントの入り口で

固まっているアンジェラが居た。どうやら起きていたようだ。

「危ないですから、テントから出ないでください」

入り口で静止しているアンジェラに小声で伝え、ゆっくりと気配のする方へ

視線を向ける。まだ少し距離があるが、その気配は迷いなくこちらへと近づいてく

る。シンの視界にその気配の主である魔物が入る。真っ黒ななんともいえない塊

だった。それは、一つの形に留まる事ができず、アメーバのようにどろどろとして

いる。目も口も鼻もない。けれど確かにその魔物がこちらを意識しているところが伝

わる。じりじりと魔物が距離を詰めてくる。

シンは一定の距離を保ちながら、後退する。

正体のわからない魔物に手を出すことに躊躇ちゅうそしていた。

あの塊に物理的な攻撃は効くのだろうか？

ポウツッと、何かが燃えたような音がした。

その音は背を向けていたテントのほうからだ。

アンジェラのことがよぎりつつさに振り返ろうとするのと、

同時に手前に居た魔物が襲い掛かる。構えていた剣で魔物をなぎ払う。

魔物は、二つに切れ、ベチャリといやな音を立てて地面に落ちる。

動く気配がないことを確認して、急いでテントの中を確認する。

中の様子は別段、変わったところはない。

しかし、アンジェラの顔色が少し悪かった。

顔を上げたアンジェラは、シンの後ろから、

ものすごい速度で近づいてくる何かに気づく。

「シン！！あぶない！！」

とつさに声を出し、その気配に向けて魔力を放つ。

先ほどテントからしたものと同じ燃えるような音がして、魔物が一瞬緑の炎に包れ、

消滅した。先ほどの音は、アンジェラがテントの中に入ってきた魔物を燃やした

音だった。はあ、はあっと苦しそうに息をするアンジェラ。

アンジェラは、この精霊界に来た当初の倦怠感と同様のけれど、それよりも強い

不調を感じていた。

いきぐるしいっ・・・。

「失礼します。アンジェラ様」

シンは、手を地面につけ前のめりに苦しそうに息を吐くアンジェラ

を寝かせ、気道

を確保する。いくらか楽になったのか、少し呼吸が落ち着く。それでも尚、息苦し

そうなアンジェラは、思わず胸にあるネックレスのイエローダイヤを握りしめる。しば

らくすると、息苦しさがなくなりだいぶ楽になる。アンジェラの横にいたシンは、水

筒をアンジェラに渡す。体を起こし、ゆっくりとアンジェラは水を飲んだ。

はあっと小さく息を吐く。

「ありがとう。シン。だいぶ落ち着いたわ」

水筒をシンに渡して礼を言う。

「いえ、私こそアンジェラ様にお礼を言わなければなりません。

助けていただきありがとうございます」

水筒を手にしてシンは、まっすぐとアンジェラを見つめ礼を述べる。

深い藍の瞳は、今は暗くて闇のようだった。

アンジェラに「外の様子を見えます」と言ってシンはテントから出て行く。

テントから出て行くシンを見送って、アンジェラを考える。

それにしても、たった二回攻撃魔法を使っただけで、こんなに体力を消耗するの

は何故なのかしら。

5歳の時から、王族として、魔法の訓練をしていたアンジェラにとつてはそれほど

疲れる作業ではないはずだった。

精霊界でも魔法を効率的に使えるように練習をしようかしら。そう
だわ。 ついでだ

から、シンに剣の稽古もつけてもらおうかしら。

うふふつと笑うアンジェラ。

この後、外の見回りを終えて戻ってくるシンは、アンジェラの提案にしぶしぶうな

ずくことになるのであった。

エルフ？

ヒュンツと風を切る音がし、剣先が眼前を掠める。

後ろに引こうとして体制を崩し、盛大にしりもちをつく。

首元には鞘に収まったままの剣が突き付けられている。

「……………今日はここまでです」

シンは剣を腰に戻して、アンジェラに手を伸ばす。

素直にその手を掴み立ちあがる。スカートの裾は土がつき、新しい模様を作っている。

「分かってはいたけれど、全然敵わないわね」

服について土を払いながら、悔しそうに呟く。

幼いころから訓練をしているシンにかなうわけはないのだが、もう少し戦えると

思っていた。姫とはいえ、自分の身を守れる程度に護身術は習っていたのに。

「十分ですよ。一般の男性くらいなら、あなた一人でも倒せるでしょう」

「そうね。でも、ここでは、非力だね。魔法だって、人間界と違っ

て勝手が違っわ」

アンジェラの反論にシンは苦笑している。シンの考えていることは分かっているわ。

姫である私が、そんなことをする必要はないと思っているのでしょう。

けれど、昨夜、魔物に襲われたときに私を守り切れなかったシンに、その言葉を

発することはできないのもわかっている。少しずるいかしら？

でも、魔法がうまく使えない以上、もう少し強くある必要があるのも確かだわ。

簡単な魔法でさえ、この精霊界では、ひどく体力を消耗する。昨夜、

「アンジェラ様、お昼にしましょう」

考え事をしているアンジェラに提案をする。

「そうね。近くに川で水を汲んでくるわ」

シンの返事も聞かずにアンジェラは、川の方へと走っていく。

シンが止めることが分かっていたからアンジェラは、返事を待たなかったのだ。

こっという時は何を言っても聞かない。

諦めたようにシンは、昼食の準備を始める。

川に到着したアンジェラは、ドレスに隠し持っている小ぶりの水筒に水を入れる。

川は比較的浅く、川の底が見える。

水面はキラキラと日差しを反射している。

アンジェラは、履いている靴を脱ぎ足をつける。

冷たくて気持ちいい。

本当は、久しぶりに水浴びでもしたいところだけど、

昼食の準備をしているシンをあまり待たせるのもかわいそうよね。

名残惜しげに川から足を出し、ハンカチで拭く。

靴を履いてから、シンの居るところへと向かう。

戻ると、焚火の準備が中途半端にされていた。

集めてきた小枝が適当なところに置いてあり、種火にするつもりであろう紙の塊

がその辺に放置されている。そして、その近くに、何か燃やしたような焦げ跡が

残っている。その様子に違和感を感じ、周りに視線を巡らすと、少し離れたところにシンの後ろ姿を見つける。

アンジェラは、疑問に思いながらも、シンのもとへ走り寄る。

シンに近づいて行くうちに、ピリピリとしたただならぬ雰囲気伝わってくる。

その雰囲気に進みを遅め、ゆっくりと近づくと、見知らぬ男がシンと対峙するよう

に立っていた。褐色の肌に深紅の髪。その髪は、無造作に一つにまとめられて

いる。印象的な金の瞳に、人のものとは異なる少しとがった耳。

「参ったな。何でこんなところにいるんだよ」

その男は、ガリガリと頭をかき、困ったようにシンを見ている。

シンは相変わらず臨戦態勢で、微動だにしない。

その様子には男は、大きくため息をつく。

「悪かったって。別にお前を攻撃したかったわけじゃないんだ。ここ最近、魔物が

増えてきたから、てっきり魔物だと思ったんだよ」

尚も警戒を解かないシン。

その男は、シンから視線を外し、アンジェラの方へと視線を移す。

「あんたの魔力があまりにも、魔界のものに近かったから、

勘違いしたんだよ。お嬢さん」

シンと対峙していたはずの男の声が後ろから聞こえる。

「えっ？」

驚きのあまり硬直するアンジェラ。

そのアンジェラを盾にするように男は立っていた。

「何のつもりだ」

その声は低く、冷たい。

「頼むから、その剣しまつてくれ。手荒なことはするつもりはない。

どちらかというと協力したいただけだ。お前らは、エルフの村に向かってんだろ？」

「エルフの村を知っているの？」

男の言葉に思わず振り返るアンジェラ。

予想以上に近くにいた男に少し動揺し、後ずさる。

男はその反応に目を細める。

「知ってる。なんたって俺の故郷だからな。知りたければ、

そこの騎士様を説得してくれねえか？」

その言葉にシンに向き直る。

アンジェラの視線に、シンは剣を腰の鞘に収め、アンジェラの元へと近寄る。

ホッと胸をなでおろす、アンジェラ。

急に腕を掴まれ、シンの後ろに匿われる。

「詳しい話を聞こう」

「ああ。もちろんしてやるよ。その前になんか食いもんくれねえか」

その発言にアンジェラだけではなく、シンも脱力する。

何を考えているか分からない金の瞳に、

敵意が無いのだけは二人にしっかりと伝わったのであった。

野良エルフ

ほんの少し前までの雰囲気では信じられないほど和やかな雰囲気です、アンジェラ

一行は昼食をとっていた。昼食の準備中に現れたこの赤い髪男は、アンジェラの

魔力を魔物と勘違いし、アンジェラが川に向かった直後に魔法を放ってシンの近

くを攻撃したらしい。その後、しばらくしてアンジェラが現れ、前回のような流れに

なった。よほど腹を空かせていたらしいこの男は、ものすごい勢いで食料を消費

して言った。荷物入れにそこそこの食料は入っているが、この先大丈夫だろうか、と

不安になるアンジェラ。

「俺は、アデル。最近、魔物が増えてきたから、見回りしてたんだわ」

腹が膨れ満足したアデルは自己紹介をする。

「はじめまして。アデル。私はアンジェラよ。私の護衛をしているのが、シンよ」

アンジェラは、警戒は解いたもののどことなく不機嫌なシンの代わりに自己紹介

を済ます。

「それで、エルフの村について詳しく聞きたいのだが」

さっさと本題を話せと言わんばかりのシンに、アンジェラは少し意外に思う。

いつも冷静で穏やかなイメージがあるのに、意外と感情的なのかしら。

「ああ、エルフの村はこの精霊界に棲むエルフの唯一の故郷だな。それ以外に

は特に集落もないからな。エルフ自体そんなに多いもんじゃねえから、必要が

ないだけだな」

アデルは特に感慨なく淡々と説明していく。

「お前らが向かってるエルフの村は、大陸を移動してたら時間がかかりかかるだ

ろうな。仮についても入れんだろう」

「それはどういう意味だ」

「そのままの意味だよ。エルフの村には結界が張られている。許可がなきゃ入れ

ないし、認知することすら難しい」

その言葉に、如何に無謀なことをしているかを思い知らされる。

本当にマリアに会えるのかしら。

「だが、お前は見た限りエルフなのだろう。

一緒に行けば問題ないのではないのか？」

シンの至極当然の質問に事なげに問題発言をするアデル。

「ああ。普通ならな。さっさと転送魔法使ってエルフの村に行くな。

けど、俺は追放されてるから無理だ」

その発言にアンジェラは言葉を失う。

それでは、この男と組む意味はないのではないだろうか。

「アンジェラ様、出発しましょう」

アデルの発言にこれ以上価値はないと判断したシンは、

アンジェラに出発を促す。

「随分せっかちなやつだな。話は最後まで聞くもんだぜ」

その言葉を見殺ししてアンジェラを立ちあがらせる。

その様子に少しばかりアデルは呆れる。

「あのなあ、俺だって何もなければお前ら声をかけねえよ。確かに俺は追放され

たけどよ、エルフの村の長と連絡ぐらいは取れるんだぜ？」

その言葉にピクリとシンの肩が動く。その様子にアデルはそのまま話を続けた。

「お前らがこの精霊界にいて、エルフの村に向かっているのだから長に聞いてい

るから知っているわけだしな」

その言葉にアンジェラは、アデルに詰め寄る。

「では、マリアについても何か知っているのね。マリアは今どういう状況なの？」

うすれば会えるの？あなたは私たちをマリアのところに連れて行ってくれるの？」

矢継ぎ早に質問するアンジェラ。

アデルはまじかでみるアンジェラの顔立ちに関心を示す。

こぼれ落ちそうな大きな藍の瞳に、程よい長さのまつ毛。

ぷくりと膨らんだ唇に柔らかそうな頬。

形の好い弓なりの眉に筋の通った鼻。

5000年以上生きてきたがここまで整った顔は、初めてだな。

詰め寄るその顔をぼうつと見ていたが、焦れたアンジェラに肩を揺さぶられ意識

を現実へと戻す。なおも質問をするアンジェラを落ち着ける。

「落ち着け。そんなに一気に聞かれても答えられねえよ」

アンジェラはその言葉に近寄り過ぎた体を離して、返答を待つ。

ドキドキと動悸がすごい。

「俺が知ってるのは、長が人間を保護したことだけで、その人間の状態について

は知らない。ただ、危害を加えるようなことはしていないし、あの様子だと丁重に

扱われているだろうよ」

アルナートの魔女の言っていたことは本当だったのね。

実のところ半信半疑であったアンジェラは、その言葉にホッと胸をなでおろす。

「あと、さっき言ったように俺は追放されてるから、その人間に会うすこともエルフ

の村に連れていくこともできない。ただ、お前らの位置を長に伝えることぐらいは

できる。その上であっちが迎えをよこすかどうか決めるだろうよ」

その言葉に少し希望が見えてきたアンジェラ。

木に背を預けながら静かに聞いていたシンが口を開く。

「何が目的だ」

その声は相変わらず冷たい。

ふっと馬鹿にしたようにアデルが笑う。

シンはアデルに鋭い視線を送る。

「俺としては、エルフの村に戻りたいわけよ。追放は不本意なものだったし、

あそこでまだやることが残ってるんでな」

「それと私たちに協力するのがどう関係するんだ？」

至極まっとうな質問にアデルは再び鼻で笑う。

「さあな。単なる勘だ」

その返答にシンは眉間にしわを寄せる。

「勘だと？」

「5000年も生きてると直感が冴えてくるもんよ」

ひょうひょうと言い放つ。

「で、どうするんだ？一緒に行動すんのかしないのか？」

アンジェラはシンの方へと縋るように視線を送る。もちろんシンはその視線の意

味を理解している。シンはしばらく逡巡した後、アンジェラに苦笑を返す。

その反応にアンジェラの表情はぱっと明るくなる。

「アデル、これからよろしくお願いするわ」

ふわりとほほ笑むアンジェラをみてアデルは、ただただ見とれていた。

魔法属性

アデルが仲間に加わってからずっとシンは機嫌が悪かった。

表面上は特に変化がないのだが、付き合いの長いアンジェラには、すぐに分かつ

てしまう。機嫌の悪いシンをちらちらと見ながらも、どうしていいか分からず困惑

するアンジェラ。日は既に暮れ、野営の準備をしているシンは、そんなアンジェラ

の視線に気づかないふりをしている。その様は他人が見てもあからさまだ。あま

りにも気の毒になったアデルは、アンジェラの側により、簡単な仕事を一つ二つ

頼む。実はそう言ったアデルの気づかいが更にシンの機嫌を損ねていることをア

デルは知らない。アンジェラがアデルの仕事で少しばかりその場から離れたのを

確認し、シンへと話かける。

「俺のことが気に食わないのは構わないが、

お嬢さんを戸惑わせるのどうなんだ？騎士様」

そのアデルの動作や一言に苛立ちを隠せないシン。

関わりたくないシンはその言葉を無視する。

「お前がそんなんじゃ、お嬢さんも苦勞するな。

心が荒れてると周りの気配に気づくのに遅れるぞ」

アデルは先程までアンジェラが座っていた近くにいる毒蛇をナイフで一突きする。

「私はあなたのことを信用しているわけではありません」

テントの杭を打っていたシンは、アデルに向き直りまっすぐと見据える。

「普通はそうだろうな。けどよ、そんなに敵対心むき出しだとお嬢さんが心配する

だろう。少なくとも表面的には穏便にできないかね」

そう言ってアデルはナイフに刺さった蛇を持ち上げる。

シンは小さくため息をつき、思いなおす。

確かにこのままだとアンジェラ様は心配のあまり思い悩むだろう。

アデルは少なくとも今すぐに何か被害を及ぼす存在ではない。

「分かりました。出来るだけ善処します」

その言葉にアデルは満足したのかにやりと口の端をあげた。

アデルとシンの話し合いが終わるころにアンジェラは、仕事を終えもどってくる。

その手には、川で綺麗に洗ってきた食器と水筒があった。

先程よりどこことなく柔和な雰囲気嬉しそうに微笑むアンジェラ。

何だかよくわからないけど仲直りしたのかしら。うふふ。

一行は野営の準備を終え、夕食をとっていた。

シンと仲良く隣に座るアンジェラとその正面に座るアデル。

シンとアンジェラは、傍から見ると美男美女のカップルにもみえる。

だが、実際には近くで会話を聞いていると、少しわがままで世間知らずなお嬢様

とその面倒をみる騎士様だ。どちらかと言うと恋人より家族だなとアデルは思う。

「それにしても、お嬢さんは随分気丈なんだな。その魔法属性で正気を保てるな

んで、さすが転送陣で精霊界に乗り込んだだけあるな」

そのアデルのセリフに二人は疑問符を頭に浮かべている。

「おいおい、まさか精霊界について何も知らずに来たわけじゃないよな？」

「ごめんなさい」

何だか怒られているような気がしてアンジェラは謝罪を口にする。

その反応にガンガンと頭が痛くなってくる。

「魔法属性と精霊界が何か関係しているのか？」

シンの質問にアデルは呆れを通り越して感心してしまう。

よくそこまで無知な状態で生きていけたな、と。

「いいか？お嬢さんの魔法属性は闇だ。そしてこの精霊界が属しているのは光

だ。単純に考えて、正反対の属性を持つお嬢さんにとってこの環境は毒以外の

なにものでもない」

そのアデルの言葉に、アンジェラは一人納得する。道理で魔法を使うのに体力

の消耗が激しいわけだ、と。そして、始めこちらに来た時に感じていた倦怠感は

そのせいだったのかと。

「で、その毒の環境では、精神にも作用してくる。普通の奴なら狂ってるだろうな。

体の不調に不安定な精神だ。そのまま魔物になってもおかしくない。ましてや、お

嬢さんの魔力だとその反動も並みじゃねえ」

それで、よほど精神修行をしていたんだなと感心していたんだがな。説明をしながらアデルは脱力していた。この数千年で人間はこうも無知になって

しまったのだろうか。それともこの二人が特別なのか？もちろんそんなアデルの

嘆きに応えられるものにはいない。

アデルの説明にふとアンジェラは思い出す。そう言えば、ここ最近体調が良くなっ

たのは、シンがアルナートの魔女に渡すように言われたイエローダイヤのネック

レスをつけてからだ。

「おそらくだけれど、その影響を受けていないのは、このネックレスのせいだと思うわ」

ドレスの下に隠してあるイエローダイヤのネックレスを出す。

そのネックレスを見て、アデルは再び驚愕する。

そして、独りごちる。

「道理で途中までまったく感じなかった魔力が、いきなり察知できるようになるわけだ」

そう、アデルがアンジェラの魔力を魔物と勘違いした一因は、急に現れた強大な

魔力であった。しかもその魔力が闇属性となれば、魔物だと誰しも思うだろう。

少なくともこの精霊界のエルフは、そう考えるだろう。

「どうしたの？」

アデルの言葉を純粹に聞き返してくるアンジェラ。

その青い瞳はどこまでも無垢だ。

面倒になり適当に流す。

「ところで、闇属性って人間にもあるものなのかしら？私が勉強した範囲では、

風、水、火、土以外は聞いたことないのだけれど」

無垢な瞳は好奇心でキラキラと輝いていた。

その質問に諦めたようにアデルはため息をつき、説明することを決めた。

まだ夜は長い。ゆっくりと説明していくか。

お勉強会

メラメラと燃える薪を囲むように、アンジェラ、シン、アデルは座っている。

アンジェラとシンのちょうど間の向かい側に座りなおし、アデルは話を続ける。

「この世界では、魔法の属性は大まかに光と闇に分かれる。その中に、風、火、

水、土などが含まれるわけだ。だから、同じ風でも、闇属性の風と光り属性の風

が存在するわけだ。ここまで大丈夫か？」

わからないことはないか確認するアデルにアンジェラは質問をする。

「この世界って言うのは、精霊界のこと？」

その質問にアデルは言い方が悪かったなと反省する。

「いや、人間界、精霊界、魔界全てのことだ。というか、この3つは、同じ世界に

あって、結界で区切られているだけだ。便宜上、人間界、精霊界、魔界と呼んで

るだけだ」

その言葉にアンジェラとシンは驚きを隠せない。

「では、実際には普段の移動手段で、魔界にも精霊界にも行けると言うことか」

信じられないと言った感じでシンは聞き返す。

「結界さえ超えられれば問題ないだろうな。まあ、人間にはその結界すら認識でき

ねえから、異世界も同然だろうけどな。今まで、一度もそんな話聞いたことないだ

ろう?」

その言葉にアンジェラは素直に返す。

「ええ」

「それは、そこに精霊界や魔界があることが認識できないからだ。実際にこの精

霊界は東の外れの山脈を越えたところにある。魔界は西の砂漠を越えた荒野に

存在している。だが、お前ら人間の常識では、東の外れの山脈と西の砂漠が大

陸の端という認識だ。まあ、しかたねえよな。存在すら認識できな

ければそうな

る」

アデルの説明に二人は絶句をしている。

そんな二人の様子をよさらにさらに説明を続ける。

「で、お前らがこの精霊界に入ってこれたのは、その結界を通り越して直接この

空間に転移してきたからだ。線ではなく点で移動したわけだ。まあ、もつとも次元

を増やせばその移動は線での移動になるんだが、んなこと説明しても混乱する

だけだろうから、省略するぞ」

さらに説明を続けようとするアデルにアンジェラが静止の声をかける。

「ちょっとまって、少し整理するから。ええっと、魔法には闇と光があつて、私たち

が知っている魔法の属性はその光と闇に内包された属性なのね」

「ああ。そうだ」

「では、何故人間の魔法の属性には、風とかの、ええと面倒だから

ここでは下位

属性でひとくくりにするわ。その下位属性の魔法しかないとされているの?」

魔法に関しては様々な勉強をしてきたが、闇や光といった言葉まったくでてきた

ことはない。どういふことなのかしら?

「それは、人間の魔力は闇と光が混同したものだからだ。

ただその比重がちがうだけだ。風魔法がとくいでも補助系が得意なやつと攻撃系

が得意な奴がいただろう?」

「ええ」

「補助が得意な奴が光属性に偏ったやつで、攻撃が得意な奴が闇属性に偏って

るやつだ。ただ、さっきも言ったように闇と光が混同して分、相殺しあって引き算

の差の分しか魔力にならない。だから人間の魔力は弱いんだよ。その上、その

混同してるせいで、明確な違いを認識できない。だから闇や光の属性がないじゃ

なくて、単にお前らが認識できないだけだ」

アデルの説明でマリアと自分のことを思い出す。マリアはどちらかというと補助系

の探索系魔法が得意だった。一方で私は、補助系魔法は全く駄目で、バカス力

攻撃する方が得意だ。

「それから、もうひとつ確認するわ。精霊界も魔界も人間界も実は一つの世界

で、ただ結界で区切られているだけなのね」

「ああ」

「なぜ、人間にその結界はおろか精霊界や魔界を認識することができないのかし

ら？アデルの話し方だと、エルフや魔族には認識できてるみたいなのに」

その口調は言外にエルフや魔族だけずるいつと伝えている。

「そこを聞か」

面倒そうにつぶやき、大きくため息をついて説明する。

「さつき魔法属性の話をしただろう？」

アデルの問いに話を進めるべく、出来るだけ正解に近い解答を出す。

「ええ、闇と光の属性の存在とそれに内包されている下位属性の話ね」

アンジェラの解答に満足そうにアデルは、話を続ける。

「そうだ。その闇と光の上に空間と時間の属性が存在する。で、結界ってのは空

間属性の魔法だ。闇と光の属性を認識できない人間がその2つを内包してる空

間の属性の魔法なんて認識できるわけないだろう」

要するにその魔法を認識できないが、効力はあるから、ないものとして扱われて

しまっわけね。納得しているアンジェラは、ふと疑問が浮かぶ。

「でも、どうして人間の認識ができない属性をエルフと魔族は認識できるの？」

「エルフは恒久の時を生き、魔族は空間移動を自在にするからだ」

アデルは先程の説明から頭ひねれば、分かるだろうとそれだけを伝えるが、アン

ジェラの頭にはたくさんの疑問符が浮かんでいる。ぼりぼりと頭をかき説明を続

ける。

「恒久の時を生きるエルフは、時属性の魔法を身につけて行く、一方でもとより異

空間に棲みかをする魔族は、空間属性の魔法を生まれながらにして身につけて

いる。この時間と空間の属性は同列の属性だ。同列の属性なら、自分が身につ

けていなくとも、認識ぐらいはできる」

結界が認識できるから、もちろんその何か存在することも認識できる。そういう

ことなのだろう。

「補足しておく、時属性を使えるエルフは、5000年以上生きてやつだけで、魔族

で空間属性が使えるのも魔王の血を色濃く受け継いだ一部の魔族だけだ。それ

以外は、常識として知ってるだけで実際にその場所に行っても確認することは

きないぜ」

その言葉にアンジェラは再び疑問を口にする。

「なら、どうして魔族もエルフも人間よりも魔力が強いのかしら？」

闇や光の上位属性の魔力を備えているなら、確かに強いだろうけど、補足を聞く

と常にそういうわけでない。むしろ、その上位属性を持っていること自体が特別な

例に聞こえる。

「エルフも魔族も闇か光、どちらかの単一属性しかもたないからだ。相殺されず

100パーセント使えるんだ。人間より強いのは当たり前だ」

その理由は至って単純なものだった。

「最後にいいかしら？」

「ああ。」

「空間転移でここまで来たことは、

私は空間属性の魔法が使えるということでもいいのかしら？」

「何の魔法陣も使わずに来たのならそうだろうな。魔方陣さえあれ

ば他属性であ

ろうと上位属性であろうと使うことはできる。ただそれに見合う魔力と魔法陣の正

確さが必要だがな。まあ、お嬢さんの比重だとほぼ100パーセントの闇属性の魔

力だから、多少魔法陣が適当でもここに着いただろうな」

途中から黙って聞いていたシンは、アンジェラに声をかける。

「アンジェラ様。そろそろお休みになった方がよろしいでしょう」

シンの提案に素直に同意をし、立ちあがる。

テントへ連れて行こうとシンが促すが、動かずににこりと微笑む。

「それだけ知識が豊富なんですから、魔法は得意でしょう？」

明日から、教えてちょうだいね」

それだけ言って、振り向きもせずにテントに入って行った。

俺に拒否権ねえのかよ。

これだけ懇切丁寧に説明したのだから、少しぐらい遠慮して欲しい。

焚火の火を弱め、小さくため息をつくアデルであった。

道順

アデルが仲間に加わって初めての夜が明けた。

いつもより少し早く起きたアンジェラは、昨夜、無理やり取り付けた約束を果たし

てもらうべく、いそいそと身支度を済ませ、アデルのもとへと駆け寄る。シンと交

代で見張りをしていたアデルは、木の幹に寄りかかりながら、口を大きく開けて

眠っている。こんな状態で本当に見張りになっているのかしら？ 一抹の不安を感じ

じるが、一刻も早く精霊界で魔法を使えるようになりたいアンジェラは、その不安

をひとまず横においておくことにする。アンジェラが近づいても相変わらず起きる

様子のないアデルを容赦なく揺さぶるが、まったく起きる気配がない。口から流

れている涎が朝日で輝いている。その様子に気力が萎えてくる。もう、みっともな

いわね。開いている口を閉じて、持っていたハンカチで涎を拭き、

そのハンカチを

洗いに行くために川へと向かう。エルフの村が川沿いにあるため、その川に沿っ

て移動している。そのおかげで常に川が近くにある。川にハンカチをつけも洗

いする。白いレースのハンカチの装飾は繊細で優美なものであったが、何度か

洗っているうちところどころに穴が開いてしまい、当初の上品さのかけらもなかつ

た。ハンカチを洗い終わり、立ち上がると風を切るような素振りの音が聞こえる。

音のする方へと歩みを進めると、見慣れた黒髪の騎士がそこにいた。重苦しい

鎧が外され、その下に着ているタイトな黒の上着と深い藍色のズボンという軽装

だ。

「おはようございます。アンジェラ様」

近づいてきたアンジェラに気づいたシンは、素振りをやめて挨拶をする。軽装の

せいで、鍛えられた体の線がくつきりと出ている。その様子に何だか、胸の鼓動

が早くなるのを感じる。その何ともいえない恥ずかしさを誤魔化すようにアンジェ

ラは挨拶を返す。

「おはよう。シン。今まで毎朝鍛錬していたの？」

アンジェラの質問に爽やかに答える。

「いえ。こつちでの鍛錬は今朝が初めてです」

それってアデルが見張りをしてくれてくれたからってことかしら。そこで、先ほどま

で必死に起こしていたアデルを思い浮かべ脱力する。その様子にシンが「どうか

なさいましたか？」と尋ねてきたが、真実を伝えて険悪な雰囲気になるのを避け

たかったので、首を振って先に野营地まで戻る。

「おう、戻ったか。今までどこに行ってたんだ？」

野营地に戻ったアンジェラを見つけるなり、陽気に声をかける。

その様子に怒りを通り越して呆れてしまう。

「川まで行つてたのよ。ところで、見張り中に寝てしまふのはどうかと思うのだけ

れど、それについて何かあるかしら？」

本当は注意する気力もほとんどなかったのだが、シンにこの事実が伝わる前に

正しておかないと面倒ごとが起きるのは目に見えているため、きちんと話をして

おく。アンジエラの責めるような口調をもつともせず、アデルは飄々と答えた。

「ありやあ、仮眠だからな。何かあればすぐに起きるぜ」

あれほど揺さぶつたにも関わらず、まったく起きなかった者の発言とは思えない、

その発言に呆れを通り越して、尊敬の念すら覚える。「そう」と力なく答えて朝食

の準備に取り掛かる。それにならいアデルも朝食の準備を始める。程なくして

戻ってきたシンも準備に加わり、その作業は10分とかからずに終わる。

各自適当なところに腰を下ろして、今日の予定を立てる。

「右も左もわからなねえのに、お前らは何を基準にここまで移動してきたんだ？」

「マリアの魔力が川沿いにあつたから、その川に沿って移動してたわ」

「それでも着くが、随分と遠回りだな」

そう言うなり、アデルは腰に下げていた皮の袋から

年端の行かない子供の腕の長さの紙を取り出す。

その紙は丸められており、その中央は細い赤の紐で結ばれている。

中央の紐を解き、紙を広げる。ずっと丸めていたせいで、端を押さえていないと

再び丸まってしまう。ところどころインクが薄れて見にくくなっているが、それでも

十分なほど正確に所在地が書かれている。

「地図？」

「精霊界の地図だ。これは少しばかり縮尺が大きいが、

エルフの村までなら十分だろう」

その地図に書かれているものはほとんどが森で、その森を囲うよう

に山脈が連

なっている。地図の右下の方に小さい赤丸がつけられている。

「この丸はなに？」

地図の上に描かれている丸を指差して尋ねる。

「そこがエルフの村だ。で、俺たちが居るのがこの位置だ」

アデルの指は地図の左上の方を指している。

「で、お前らが辿ってきた川がこれだな」

その川は左上のほうから下に伸び、しばらくすると途中から右側へと伸びてい

る。そして、地図の中央辺りで二手に分かれていた。

「川に沿って進むより、南東の方向に進んだ方が距離的近いだろう。」

確かに、川に沿って移動していると一度南に進んでから東に進むので、

少し遠回りにはなる。

「途中で水が補給できないのは、きついな。この距離だと、1週間は水の確保が

できないことになる。無理ではないが、今のペースで進むことはできない」

今まで静かに聴いていたシンが、口を開く。アンジェラ抜きであれば、おそらくは

このようなことは言わなかったのだろう。そのことを強く意識しているアンジェラ

は、その心うちに歯がゆさを抱いていた。

「ああ。それなら問題ない。途中に俺の小屋がある。3日も歩けば着くだろう」

アデルは横目でアンジェラを見てから、口の端をあげて答えた。

その視線に自分の思いを見透かされたような居心地の悪さを抱く。

「そうか。では、その道で進むとしよう」

話し合いが終わりそうな雰囲気で、アンジェラは焦って口を開く。

「確認しておきたいのだけど…」

とつさに口を開いたのはいいが、話そうとした内容がただの足手まといでしかない

いことを示すようなものだったため歯切れが悪くなる。

「何でしょうか？」

シンは罰が悪そうだなアンジェラを気遣うように柔らかい口調で聞き返す。

「私の剣術と魔術の訓練の時間はどうなるのかしら？」

足を引っ張っているという自責の念から、

知らず知らずのうちに俯き加減になってしまふ。

「もちろん、それも考慮したうえでの話です」

さも当たり前のことのように答えるシンに、

それでも尚、自信なさげ聞き返してしまう。

「そうなの？」

未だに落ち込み気味のアンジェラに、手を伸ばし優しく頭をなでる。

「当たり前です。あなたの最終目的はエルフの村に

到着することではないでしょう？」

頭をなでていた手は、そのまま頬まで流れてくる。

その手の親指は優しく頬を撫でている。

「そうね。ごめんなさい。気弱になっていたわ」

顔を上げまっすぐにシンを見つめる。

その先の深い藍の瞳は、夜の海のように静かに揺らめいていた。

「ありがとう。シン」

お礼を述べて立ち上がり、「出発しましょう」とアデルとシンに向かって元気よく言

い放つ。先ほどの陰りはもうそこにはなかった。

さっさと立ち上がり出発の準備をしている二人を傍らにアデルは独りごちた。

「朝からあてられると、なかなかきついな。」

これから先も当分この調子であてられるのではと、

考えてやるせない気持ちになり、天を仰ぐと空は快晴だった。

道順（後書き）

何だか知らないうちに甘い雰囲気になってしまいました。自分で書いていて言うのもなんですが、朝からあてられたアデルが気の毒です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5527w/>

世界の柱

2011年11月15日16時04分発行